

# RIPESS

**Working Paper No.68**

## “共創空間”を開発することの学問的意義 －「共創空間開発学」の構築を目指して－

大場 裕之  
麗澤大学 経済学部 教授

ライフスタイル研究会

平成27年3月31日

RIPESS 麗澤大学経済社会総合研究センター

“共創空間”を開発することの学問的意義  
—「共創空間開発学」の構築を目指して—

大場裕之\*・山岡平三\*\*

Developing “Co-Creative Space”:  
Does it have any significant meaning as an academic discipline?  
—A paradigm shift from “*homo economicus* model” to “Co-creative model”—  
Oba, Hiroyuki Yamaoka, Heizo

“共創空間”とは異なる価値観を持つ集団による意味探究空間であり、個々人の意識や価値判断を問題とする。この空間を開発することによって、自己中心的な価値判断をする人間（経済人）の本質に気づき、マックス・ウェーバーの「価値自由」を探究するところに学問的な意義がある。

技法的には、従来の論理至上主義的技法でもなければ、ある特定の個人の知が優先される技法でもない。共創空間開発技法とは、「価値自由」空間を実現し、共創知によってマインド・セットをカイゼンする技法である。具体的には、ボール（命題＝問い）と複数のマグネット（価値判断する自己の集合）、ボード（自己発見の鏡）によって個々の論理・理性（考え方）だけではなく、理性と感性（感じ方）とをつなぎ、開放系の共創知による意識空間を創出する。

この空間を体験的に知る（共創知）ことによって、自己の理性と感性が吟味され、自己解放される可能性が生まれるだけではなく、自らの自由意志によって、偽り・幻想ではない真理に向かう自由を享受することができる。

“Co-Creative Space” (CCS) is the space to explore the meanings of life theme by a group of holding different mind-set, which matters the individual's yardstick of value judgment. By developing CCS, it gives awareness of the very nature of self-centered value judgment of *homo economicus* and explores the mind-set of “Value-free (Wertfreiheit)” of Max Weber, which gives importance of an academic discipline.

As a methodology, it is neither a conventional method of building logical system, nor the method of attributing to the specific individual. CCS realizes the “Value-free” space, and is the method of implementing mind-set Kaizen by Co-Creative wisdom. That is, it creates the open conscious space by relating rational mind with sensitivity by using a Ball (common theme), Magnets (set of value judging self) and a Board (mirror of discovering own self).

Experiencing this space makes it possible not only to examine and release oneself from self-centered thinking and feeling, but also to stand at the gateway to the Truth by one's own free-will.

キーワード：経済人、価値判断、価値自由、共創空間、自由意志、真理

---

\* 麗澤大学経済学部教授・大学院経済研究科教授。

\*\* 共創空間開発学会準備フォーラム（英文名 Society for Co-Creative Development Studies, CDS）幹事。共創空間開発研究会・ライフスタイル研究会メンバー。

## はじめに

小論は、「共創空間開発学のすすめ」（2015 年 3 月出版）の本の土台となっている理論的および方法論的意義を明らかにすることを目的とする。全体の構成および理論的意義については、大場が担当し、方法論的意義については主に山岡が担当した。

共創空間開発学が学問として成立するためには、どのような意義もしくは必要性があるのだろうか。そのためには、その前提となる「学問」とは何か、まず初めに明らかにしておく必要がある。

古典的名著として知られる福澤諭吉[1880 年、現代語訳 2009 年]の「学問のすすめ」では、学問とは本を読むことだけではなく、実生活、実際の経済、さらには現実の世の中の流れを察知するもの（同上、[現代語訳 2009 年]22～23 ページ）とし、経験知を含む広義の意味で理解されている。

学問とは、ごくシンプルに表現すれば、“学び問う”という行為（doing）であるが、学ぶことと問うことは必ずしも同じ行為ではない。なぜならば、学ぶとは知らないことを知ることによって“気づき”がもたらされる行為であるのに対して、問うとは学んだことを自らの“自由意志”で吟味する（“鍛える”）行為であるからに他ならない。このような行為によってもたらされるものとは、「気づき」と「鍛錬」、そして「自由意志」という果実である。即ち、学問を身に着けた人とは、自らの心の暗やみに光があたり、自分が無知な者、心貧しき者であることに「気づき」、真偽を見分けるように「鍛錬」され、人知をはるかに超えた真理に向かって前進する「自由意志」が与えられた人間である。

従って、「共創空間」を開発することが学問となるためには、この 4 つの行為（知る・学ぶ・問う・吟味する）を共に実践すること、およびその帰結としての 3 つの果実（気づき、鍛錬、自由意志）を共有体験することの意義が明確化される必要が生ずる。つまり、学問として、共創空間開発学が成立するためには、3 つの学問上の意義、即ち、理論的意義（Why）、および実践的、方法論的意義（How）、さらには政策論的意義（What to do）が必要となるが、小論では、理論的意義（Why）と方法論的意義（How）を中心に言及する。

## 1. 理論的意義（Why）価値自由の学問としての意義

共創空間開発学の学問としての理論的意義について考察する。共創空間開発学は、社会科学、もしくは人文科学の専門分野として、理論的にどのような意義があるのだろうか。その意義とは、「価値自由」の空間を開発することによって、経済学のみならず、広い意味での社会科学全般に存在する価値判断問題を陽表的に取り上げることができるだけでなく、個々人の価値判断の自己中心性という本質的な問題に気づくことができる。この問題を「価値自由」空間の中で、客観的に分析しその原因の所在を明らかにし、判断基準を見直し、真理に向かって最適な意思決定をするための解決策を提示できるところにある。つまり、経済人としてのあらゆる人間が行う主観的な「価値判断」を客観的に問う（Why）空間であることに理論的な意義を見いだすことができる。「価値自由」の空間とは、まさに

「共創」空間そのものであり、後述するように、マックス・ウェーバーが提起した価値判断問題に対する客観的な分析フレームとその解を提供している。

経済哲学やヨーゼフ・シュンペーター研究の第一人者として知られている塩野谷祐一[1981、1984]は、この問題について、価値中立的な科学観は現実離れしているとして批判している。そのうえで、社会科学において価値判断の問題は事実上無視しえない役割を演じているとし、以下の4点を指摘している（同上[1984]、4ページ）。（1）社会学者が選択する研究課題は、何が社会的に重要な価値であるかについての時代の雰囲気や科学者の主観的観念によって影響される（問題の選択）。（2）社会学者の抱く価値判断は概念の形成や分析の仕方の中まで入り込み、結論の方向を規定する（結論の内容の決定）。（3）社会科学において価値と事実とを截然と区別することは不可能であり、純粋に記述的と考えられる言明の中にも、価値判断が潜入する（事実の識別）。（4）社会科学においては、理論の妥当性を評価する基準そのものが価値によって規定されている（証拠の評価）。

塩野谷は、社会科学がとることのできる立場・態度として、3つあり、①社会科学が価値から自由であること<マックス・ウェーバー流の「価値自由」(Wertfreiheit)>、②価値を前提として示すこと<ミュルダール流の「価値前提」(value-premise)>、③価値を対象として研究すること<「価値研究」>を指摘している。このなかで、塩野谷は③の「価値研究」の立場をとっている（同上[1984]、5～7ページ）。彼によれば、この「価値研究」と名づけられる立場とは、価値を否定的にはみないで、価値は良かれ悪しかれ、人間と社会を規定している客観的な事実であると考えている。そして、社会科学の課題とは、この価値の事実性をとらえることであるとし、価値の要素から絶縁をはかったり（「価値自由」）、あるいは外生的な与件としてのみそれらと接触を保つ（「価値前提」）立場と一線を画している（同上[1984]、8ページ）。この立場とは、まさに、我々の「共創空間開発学」が依拠するところである。

もっともこのアプローチは、「価値自由」の立場に立つウェーバーと矛盾するものではなく、むしろ「価値研究」の重要性を積極的に評価している。即ち、ウェーバー[1972]によれば、価値自由（ドイツ語のヴェールトフライ）とは、大学の授業（講壇）の事例をもとに、大学講師による実践的評価と（ある一定の）科学とを区別し、科学が評価から「自由」であることを指し示している。つまり、ウェーバーは、価値自由とは、自他の価値評価（Werturteile）から距離を置いた自由な態度のことをさし、次のように主張している。科学—純粋に論理的な解明[推論、演繹]や経験的な事実確定—と実践的・倫理的または世界観的な評価とを区別し、後者については聴講者たちに対してのみならず自分自身に対しても厳しく明らかにすることを主張している（同上[1972]、19～22ページ）。従って、ウェーバーは、価値自由が価値判断（究極において特定の理想を基礎とし、それゆえ「主観的な」起源を発するもの）を排除するとは考えておらず、むしろ、後者の価値判断について科学的に論究することを奨励している。

ウェーバー[1998]によれば、理想や価値判断に関する科学的分析・批判とは、それが何

を意味し、何を目的とするのか、という問題であり、科学的考察の対象となりうるのは、具体的には以下の 4 つの階層における問い・答えを指し示している（同上[1998]、30～35 ページ、下線部分は筆者）。

- (1) 目的が与えられた場合、「考えられる」手段が、どの程度「その目的に」適しているか、という問いに答えることである。採用可能な特定の手段で、ある特定の目的をおよそ達成できるかどうか、その客観的可能性[チャンス]がどの程度か、見積もることができる。
- (2) 意欲された目的の達成が、予見できる出来事の連鎖を介して、他のいかなる価値を損なうことになるか、そうした形でなにを「犠牲にする」か、という問いに答えることができる。責任をもって行為する人間の自己省察で、目的と結果との相互秤量<sup>しやうりやう</sup>を可能にすることこそが、[科学にもとづく]技術的批判の、もっとも本質的な機能のひとつである。（もっとも、この秤量<sup>しやうりやう</sup>自体に決着をつけること[目的を採って犠牲を甘受するか、それとも、目的を断念して犠牲を避けるか、どちらかを選択すること]は、科学の任務ではなく、意欲する人間の課題である。）
- (3) 具体的な目的の根底にある、あるいはありうる「理念」を、まず開示し、論理的な連関をたどって展開する（問う）ことにより、かれが意欲し、選択する目的を、その連関と意義とに即して、かれに自覚させることができる。人間の文化生活に関するあらゆる科学のもっとも本質的な任務のひとつは、こうした「理念」（精神的価値）を解明して、精神的に理解させることにある。
- (4) 意欲された目的とその根底にある理想を、ただたんに理解させ、追体験させるだけではなく、それらを批判的に「評価する」ことをも、教えることである。この批判（的評価）は、弁証論的な性格をもちうる。（意欲された）目的を立てることにより、意欲する者を助けて、かれの意欲内容の根底にある究極の公理、すなわち、かれが無意識のうちに出発点とし、あるいは一矛盾に陥らず、首尾一貫性を保つためには一出発点とせざるをえなかったはずの究極の価値規準を、みずから反省させることができる。（もっとも、価値判断をくだす主体が、この究極の価値規準を[意識した上で]表白すべきか否か、これは、かれ個人の内奥に属する事柄であり、かれの意欲と良心の問題であって、経験的知識の問題ではない。）

このウェーバーの 4 つの価値判断問題とは以下のような問いかけである。第 1 は、「（意欲され）あたえられた目的を達成するための手段は適切であり、かつ達成可能なのか」。第 2 は、「意欲された目的を達成するために、何を犠牲にするか」。第 3 は、「意欲された具体的な目的の根底にある <理念（精神的価値）>をどのようにすれば自覚させ、理解させることができるのか」。第 4 は、「意欲された具体的な目的とその根底にある理想をどのように批判的に「評価」し、みずから反省させることができるのか」。

この 4 つの価値判断問題に対する科学的考察とは、まさに我々が提唱する「共創空間」を

開発することによって、体系的に実現されるところに意義を認めることができる。

そこで、こうした価値判断問題を取り扱うために、どのような「共創空間」を開発すればよいのか、具体的に知るために、「意欲された目的」の一例として、“音楽を仕事（職業）とする”目的を取り上げる<sup>1</sup>。この目的に対する価値判断の科学的取扱いが「共創空間」でどのように実現されるのか、考察することとしたい。

まず、第1の価値判断問題とは、「目的達成手段の適合性・達成可能性」を判断する問題である。我々の例では、「与えられた目的」とは「音楽を仕事（職業）とする」ことであり、この目的を遂行するためには、どのような手段が適しているのか、適していないのか、判断する問題となる。ただ音楽を聴くだけではなく、作詞・作曲や楽器で演奏することが好きで、好きな趣味を仕事（職業）にすると考えたとする。その際、音楽を専門とする大学でなくても、普通の大学の音楽サークルなどでの経験を積むことが、手段として適しているのだろうか、という問いかけである。

もっとも、ウェーバーは適合性と達成可能性を同等と見做しているが、必ずしも同じではない。なぜならば、「適する」という判断をする場合、「適する」という概念には、条件や資格が合っていることと能力的な部分（達成可能である）が混在しており、必ずしも両者は同一の価値判断軸ではないので、分けて考えることが現実的である。

そこで、「適する」という判断を2つに分けてみる。まず、初めに、条件や資格に合っている部分に関して、「大学の音楽サークルなどで経験することが、音楽を仕事とする手段として合っているのか」という問いを開発（設定）する。この問いかけに対して、複数の価値判断主体が自ら意見を表明することによって、自己開示し、その適合性に関する多様な見解を客観的に知見「見える化」することができる。しかし、これでは、適合性問題と向き合ったことにはならない。なぜならば、もう一つの達成可能性の視点が欠落しているからである。

そこで次に必要なステップとは、もうひとつの判断軸（達成可能である）を立てることによって、「（条件や資格に）合っている」軸と交差させ、目的達成手段の適合性問題の全体像を知りうる二次元空間（平面）を開発することとなる。この共創プロセスを通じて、「音楽を仕事とする目的」を達成する手段の適合性について、当初とは異なる新らなる価値判断基準を手にすることができる。

第2は、「意欲された目的達成のために生ずる犠牲」を判断する問題である。この問題については、「意欲された目的の達成」とは、我々の例では、「好きな音楽を仕事（職業）とする」ことであるから、この目的の達成と「他の価値を犠牲にする」という結果を相互<sup>しょうりょう</sup>秤量する（測りにかける）共創軸を開発することとなる。例えば、「好きな音楽を仕事とするた

---

<sup>1</sup> 共創空間開発技法を用いて、音楽を活用し「仕事や文化の価値」を解き明かす試みは、麗澤大学経済学部開設された講義「Culture Studies」において、Peter A. Luff 教授との共創によって2013年から実践されている。

めに、他（の価値、例えば安定的な経済的報酬）を犠牲にするか、あるいは、しないか」という判断軸を開発する。あるいは、「好きな音楽を職業とすることは望ましいことか否か」という軸と「他の価値を犠牲にできるか否か」という、もう一つの軸を開発し、両者をクロスさせる。この空間において、犠牲を甘受し、目的を優先するか、あるいは、目的を断念し犠牲を避けるかという意志決定のための自他を含む、公的な価値判断材料が用意されることになる。

第3は、「“理念”に対する自覚」に関する価値判断問題である。つまり、意欲された具体的な目的の根底にある＜理念（精神的価値）＞をどのようにすれば自覚させ、理解させることができるのか、という問題である。意欲された具体的な目的とは、「音楽を仕事（職業）とする」ことでありが、その根底にある「理念」とは一体何か。この問題を解明するためにも、共創空間を開発することは有効である。なぜならば、「音楽を仕事（職業）とする」ことの根底に「理念」（精神的価値）がある場合とない場合とを明らかにするだけではなく、ある場合には、その価値について当人自らが自覚するだけではなく、当人以外にもその精神的価値の意義に気づくこと、理解することも可能となるからである。

例えば、クラシック音楽の偉大な作曲者として知られる J.S. バッハの場合、音楽を仕事とする理念が明確に表明されている。彼が作曲した名曲「主よ人の望みの喜びよ (Jesu, Joy of Man's Desiring)」には、音楽を仕事にすることの彼の「理念」が如実に表現されている。その価値とは、普遍的かつ絶対的な神の愛、平安、そして喜びである。そして、その喜びの根源が唯一の救い主であるイエス・キリストにあり、この曲を通じて救い主を賛美したいという思いがひしひしと伝わってくる。

そして最後に第4は、「目的や“理念”に対する評価」に関する価値判断問題である。つまり、意欲された具体的な目的やその根底にある＜理念＞をどのように批判的に「評価」し、みずから反省させることができるのか、という問題である。この問題についても、共創空間に参加することによって、目的や「理念」（精神的価値）に対する多様な価値観を知ることができるだけではなく、自らの価値判断を吟味、評価することができる。我々の例である「好きな音楽を仕事とする」という意欲された目的とその根底にある理想については、「自らの好み（音楽）を仕事とするのは何のためか」という問いを提起し、自己満足のためなのか、それとも何らかの志しのためなのか、という判断軸を設定する。そうすれば、この軸上に自らの価値観だけではなく、自分とは異なる価値観が現われてくる。

この問いに対する共創結果をもとに、音楽を仕事とすることに対する自らの価値観に対してみずから反省する必要があるのか、否かを吟味するもう一つの判断軸を開発する。そして、前者の「何のためか」という軸と交差させ、自由意志に基づいて自らの立ち位置を変化させることによって、自らの価値観の変化の有無にも気づくこととなる。

もし、共創空間が不在であれば、それを他者の視点を含んで批判的に評価することは難しいことが了解される。例えば、共創空間に入る当初、「音楽を仕事とすること」という意欲された目的に対する理念を金銭的価値に置いている場合でも、共創空間で当初の価値判

断そのものが吟味され変化することが可能となる。この共創プロセスを通じて、ウェーバー[1998]が指摘しているような「客観的に妥当な真理」(同[1998]、27 ページ)としての精神的価値の存在に気づき、体験できる可能性を生み出している。

以上のような価値判断に関する4つの科学的考察の根底に流れる人間の意欲の根源(あるものを具体的に意欲する人間の行為)について、ウェーバーは、「そのもの自体の価値のため」か、それとも、究極において意欲されたもの[の実現]に役立つ手段としてか、どちらかである(同[1998]、30～31 ページ)、と指摘している。我々が提唱する「共創空間開発学」に置き換えてみると、“共創空間”あるいは“共に創る”価値を人間が意欲する究極的な価値そのものとして捉えるか、あるいは、そのような価値の実現に役立つ手段として活用するか、という選択となる。この選択は個人の自由意志に委ねられていることは言うまでもない。

もっとも、ウェーバーの価値判断に関する科学的考察には、価値判断に内在する本質的なバイアスが自己中心性にあるという側面については、必ずしも十分には触れられていない。共創空間を開発することによって、このバイアスにも気づき、自己解放される自由が存在し、それを享受できる可能性を示唆している。

## 2. 方法論的・実践的意義(How): 共創知による知の「メソッド」

次に、価値自由空間としての「共創空間」を開発する方法論的・実践的意義について、考察してみたい。

そのためにも、これまでの技法を吟味し、方法論としての「共創空間開発」技法を位置づける必要がある。方法論的には、「共創知(異質な知)によるイノベーション空間」としての意義を見出すことができる。そのために、まず初めに、知の「考え方」の基盤となる論理学の技法(第1節)と衆人知を生み出す方法としての「集団発想法」(第2、3節)を検討したのち、技法としての必要性和その特質、実践方法、成果および直面する課題(第4節)について論ずる。

### (1) 個人知に根差す論理学からのスタート

社会の中で人が人間らしく共に生きていくうえで、自身の「考え」を持ち、他者の「考え」を認知することが必要である。その「考え」の奥には背後には、そこに至る「考え方」があり、「考え」の違いは「考え方」の違いから生ずることが多い。故に「考え方」を重視し考察する原点があると考ええる。

この「考え方」に関しては、古くから論理学において提唱されているが、論理学は個人の思考を対象とする思考パターンの研究である。

論理学の祖とされるアリストテレス(B C 384～322)は、学問研究または弁論の方法を示した。中世になると、キリスト教の教義を体系化した演繹的論理学が生まれた。近世においては、科学的認識・経験的認識の重要性が理解され帰納的論理学が成立した。



帰納論理学の系譜には、科学研究の方法を考察する方法論として弁証法や論理実証主義が唱えられた。しかし、この論理実証主義が幅をきかせて進展すると、この方法論を通じた知見のみが科学となり論理性が優先され、理性だけでなく感性を併せ持つ存在である人間性が失われてしまうこととなった。この点、感性の重要性に着目したのは、ドイツの思想家アレクサンダー・G・バウムガルテンである。彼は1735年に美学を提唱したが、可知的なものを上位認識能力とする論理学に対して、可感的なものは感性の学として美学を定義づけている。つまり、論理学が従来対象としなかった下位認識能力を扱う学であり、論理学に対して感性学とも言われている。

論理学は論文の論理構成に係わるものであり、思考を重ねて論文を書き、知見を開陳するためには、必要であり有益な学問である。そして、発表者は他者の先行研究を調査研究して新たに自説を組み立てるのであるが、多くの場合は個人による思考作業であるため所詮「個人知」の域を出ない。

しかしながら、論文や知見には個人が単独で作成するものばかりではなく、共同で作成することも可能である。この共同の思考作業の産物を「衆人知（多人数が参加した知恵の複合知）」と称することにする。世間で言われる「衆知を集める」ことである。

この衆人知は、名称こそ異なるが（集合知、複合知、共創知、集団知など）現代では広く関心がもたれている。科学技術の発展や情報化、さらには価値観の多様化した現代にあって、独創的な人物が一人だけで大きな成果を生むのは難しい時代になっている。多才な個性・能力を持った様々な分野の人たちが、才能や価値観をお互いに放出し合って複合し、新たな成果を生み出す場とプロセスが必要になってきている。この衆人知の着想は、学術研究の場面だけではなく、一般社会、ビジネスの現場における現実的な問題解決にも応用されている。

## （2）衆人知によるこれまでの技法

### ①「ブレインストーミング」技法について

ブレインストーミング（brain storming、以下BSと略す）は、日本では『独創力を伸ばせ』（A・F・オズボーン著、上野一郎訳、ダイヤモンド社、1958年初版）で紹介された技法である。同書によると「1938年に同氏が経営する広告会社で、組織的なアイデアの出し方を採用した。参加者はこの仕事を「ブレインストーム会議」と名づけた。その後、アメリカで広く知れわたり、ウェブスター辞典では「構成員が自発的に提出するアイデアを積みあげ、ある具体的な問題を解決する方法を見つけようとするグループの試みで、実際の会議のテクニックのこと」と定義され、1950年代の初期に急速に普及した（同[1958]、104ページ）と指摘されている。

このBS会議の進め方には4つの基本ルールがある（同[1958]、107ページ）。

①よい悪いの批判はしない。出てきたアイデアに反対することは後まで控えなければならない。

②自由奔放を歓迎する。アイデアは自由奔放であればあるほどよい。考え出すことは大変だが、ケチをつけることはワケない。

③量を求める。アイデアの数が多ければ多いほど、いいアイデアが増える可能性が多くなる。

④結合と改善を求める。参加者は自分のアイデアを出すばかりでなく、他人のアイデアをもっとよいものに変えるにはどうしたらよいか、また 2、3 のアイデアをさらに別のアイデアにまとめるには、どうしたらよいかを考えなければならない。

また、同書[1958]には、会議を有効に進めるための留意事項として、リーダーの役割（10 ページ）、②問題・テーマの示し方（109 ページ）、③参加者の構成・人数（115 ページ）、④会議の準備手続き（118 ページ）などが示されている。

次に、会議が有効に進行されて提案されたアイデアは、具体的に実施されなければ意味をなさない。そこで B S では「提案されたアイデアの扱い方」（137 ページ）を示している。さらに、アイデアを出す参加者への動機づけ（208 ページ）、発想の活性化（148 ページ）にも言及している。

こうした B S の原則や手続、応用などの知識は、経験を重ねるにつれて深化されてきたと言われる。アメリカでは、多くの企業や大学等の研究機関で実施され、その実施例が数多く紹介されている。発案者のオズボーンのもとには、多くの実施例や所見が集められ年々 B S が深化発展していく様子を知ることができる。「アメリカの生活水準の高さは独創的思考によって手に入れたものである」（同[1958]、4 ページ）とも指摘している。

日本では同書の初版は 1958 年（昭和 33 年）に発刊され、その後の高度経済成長期に各企業が創造革新を重視し、企業研修や企画部門の中で B S が実施されてきた。B S の適応分野としては、新製品開発・現状の改善・事業開発・組織開発・店舗開発、イベント企画・広告コピーをあげている（星野匡[2005]『発想法入門』日経文庫、152 ページ）。しかし、適応分野に学生向けの創造力開発講座をあげていないのは日本的であると感じる。アメリカでは、多くの大学で B S を理解して講座や教材作りがなされている（同[2005]、114、118、137 ページ）。

## ②「K J 法」の技法について

K J 法は、文化人類学者の川喜田二郎の頭文字をとって名づけられたことでよく知らており、日本では B S と並んで広く使われている技法である。

この K J 法は、川喜田二郎著『発想法』（中公新書、1967 年初版、1999 年 73 版 220 ページ）で紹介されている。もともとこの技法は、著者が研究活動の一環として野外で観察した複雑多様なデータを、個々のデータを生かしつつまとめあげるには、どうしたらよいかと思案する過程で発案されたものである。つまり、野外観察から論文に仕上げる科学的方法論を探していたのである。

川喜田によれば、K J 法は発想法の一つであり、「いろいろな資料から、何か新しいアイ

デアを引っ張り出すという意味」であると述べている。論理的にはインダクション（induction 演繹法）、デダクション（deduction 帰納法）とならんでアブダクション（abduction）があり、これに日本語をあてると「発想法」になる。川喜田は、この3つの方法の源流を探るとアリストテレスに行きつくと、哲学者上山春平から教示を受けたと述べている（同[1967]、4-5 ページ）。

この文脈からすると、発想法は論理学の系統に含まれると考えられ、論理学が学問なら発想法もまた学問といえるのではないか。

KJ法は、当初は上述のとおり学術研究の方法論としてスタートしたが、その後産業界に広く普及し、企業の様々な問題解決に応用・実施されてきた。日本で生まれた代表的な技法と言われている。

そもそも、この技法が最初に紹介された著作は、川喜田『パーティ学』（社会思想社、1964年）で「紙切れ法」と名づけられている。その後「KJ法」と改名されて、同氏の『発想法』（中公新書、1967年）が発刊され、次第にKJ法として世に普及し研修体系もでき上がった。さらに同氏の「KJ法—混沌をして語らしめる」（中央公論新社、1986年）が発刊され、集大成を見るに至ったのである。最初の1964年から集大成まで22年が経過したのである。KJ法は実践の場で活用されることを本命とする技法であるから、現場の苦心・工夫や失敗・成功などの経験を踏まえて、それらを共有財産として深化してきた<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup>KJ法はどのような手順で進められるのか、簡略に説明するために、高橋誠著『問題解決手法の知識』（日経文庫、1999年、2版）をもとに基本的なプロセス・手順を紹介する。

KJ法の特徴は、様々な現場データや情報、いろいろな人のバラバラな意見を、名刺のようなカードに記入し、その意味を読み取って、内容が本質的に似たものを集約し、そこから新たな仮説やアイデアを発見しようとするところにある（同117ページ）。

KJ法の進め方・手順は、次のステップを踏む（同117-121ページ）。

- ①テーマを決める・・・テーマを明確に表現し、語意を共有するために定義づける。
- ②アイデアを出す・・・一枚のカード（名刺の大きさ）に一つのアイデアを具体的に書く。各人は思いついたことを自由に書く、枚数は多い方が望ましい。
- ③カードをまとめる・・・カード化したアイデアを、内容が本質的に似ているという観点から参加者が協議してグループに分けて集める。まとめきれないカードは単独カードとして残す。
- ④各カード群にタイトルをつける・・・グループ分けしたカード群の内容の要点をくみ取り、参加者が協議して、要約したタイトルを新たなカードに書いて、カード群の上に表札のつもりで置く。すべてのカード群にタイトルを付け終わったら、次に二段目の上位グループの編成に進む。
- ⑤上位グループにまとめる・・・二段目のグループ編成は、一段目のカード群に付けたタイトルのカードと単独のカードをもとに、内容が本質的に似ているという観点から参加者が協議してグループに分けて集める。これを中グループとして、内容の要点をくみ取り要約したタイトルを新たなカードに書いて、二段目のグループ編成は完了する。これを繰り返して、中グループから大グループ、大々グループへと段階的に進める。最終的に、幾つかのグループに行きついたところで、次のステップの図解へと進む。つまり「見える化」するのである。
- ⑥図解にしてまとめる・・・出来上がった幾つかの上位のグループ、まとめきれなかった中小のグループ、及び単独のカードを、かたまりごとに親近性を重視して模造紙にレイアウトする。レイアウトが終わったら、すべてのカードを貼り付ける。グループごとに線で囲んだり、グループ間の関係を矢印や線で結んだりして図解が完了する。そして、模造紙の最上部に始めに決めたテーマを書き入れる。

以上が、K J法の進め方の概略であるが、大きく分けると 2 つのステップから成り立っている。それは、事実やアイデアをカード化して多く出す「発散思考」の段階と、出されたカードをまとめ上げる「収束思考」の段階である。世の中には、発想法と呼ばれる技法は何十何百とあるが、そのほとんどが発散思考と収束思考のプロセスを含有している。

先に紹介した B S も、アイデアを自由に多く出す段階と結合と改善による収束の段階とが含まれている。

### (3) B S と K J 技法から共創空間開発技法へ

前節で、発散思考と収束思考について触れたが、それぞれについて高橋誠[1999]は以下のように指摘している。

発散思考は、事実やアイデアを思いつくための技法である。何かを思いつく能力、つまり連想の働きについて、古代ギリシャのアリストテレスは「連想の法則」と名づけて、連想しやすいものを「反対」「接近」「類似」の 3 つに分けたと言われている。例えば反対連想は「白と言われれば黒」、接近連想は「山と言えは川」、類似連想は「ボールから地球」と言うような思いつきである。この流れにそって、高橋誠は、発散思考を、まったく自由に思いつくままに出す自由連想法、何かのヒントを与えて思いつかせる強制連想法、本質的に似たものをヒントにする類比発想法の 3 種類に分類している。一方、収束思考は、発散思考の次にくる思考で、事実やアイデアを何らかの方法でまとめるための技法であると定義している（同[1999]、50～52 ページ）。

このことから、B S も K J 法も、進める過程で発散思考と収束思考を繰り返していることが読み取れる。しかし、K J 法はカードのグループ分けを段階的に重ねる作業を通して収束へ向かうことに力点が置かれている。一方、B S は会議の 4 つの基本ルールで強調しているように、まずアイデアを多く出させる発散に力点が置かれている。

カードの使用については、K J 法はカードを使うことを大前提にしているが、B S においても「改良型 B S」と称してカードを使う方法も日本では行われている。それは、B S は会議の出席者が発言したアイデアを記録係が模造紙などに次々と書くことが原則ですが、出席メンバーに地位の上下があったり、他の発言を気にする人がいると、発言が出難い雰囲気が生じるので、前もってカードに書く時間を設定して一斉に提出する方法である。

K J 法では、実施する前段階でテーマ設定をするが、川喜田の『発想法』では、その趣旨を次のように述べている。「何をテーマとするか、そのテーマは何を意味するか」を参加

---

⑦図解の効果・・・ 以上のプロセスを経て出来上がった模造紙を参加者全員で眺めると、始めに決めたテーマに関するアイデアの全体像と相互関係がはっきりする。また、出されたアイデアのカードはすべて網羅されており、参加者全員がグループづくりやタイトル作成に参画しているので、達成感や満足感を共有・共感できる。問題解決の実行段階では、この共感が大きな効果を発揮するのである。企業で広く応用されている由縁でもある。この図解をもとに内容を文章・レポートにして、図解の隙間や表現不足を補い、後々のために一体記録として残すことも有益である。

者が明確に認識し、共有する必要がある。この段階では参加者の意見をできるだけ吐き出さなければならないが、精神においてB Sが一番よい。また、テーマに対する事実やアイデアをカード化する時もB S的精神で集積すべきである（同[1999]、67～68 ページ）。

以上のように、衆知を集める集団発想法の代表的存在としてB SとK J法を取上げたが、両者には相互に共通性や補完性があることがわかる。

川喜田の『発想法』には筆者が注目する次の記述がある。「問題というものは、理性的に自覚的にとらえる前に「なにか問題を感じる」という段階が先行しているのが普通であろう。この日常的現象に気づくことが大切なのだ。・・・中略・・・自分が問題だと感じていることに、関係のありそうなことがらを全部列挙してみるのがよい。・・・中略・・・はじめて問題の構造がわかるのである」（同[1999]、29 ページ）。

この文脈の続きは、内容をカード化してK J法を続けることになるのだが、筆者が注目する点は、問題とするテーマを「理性」と「感性」の両面からアプローチして組み立て全体像を認識しようとする発想である。

次に述べる「共創空間開発(Co-Creative Space Development)技法、通称“共創マトリックス”」（以下、CSD 技法と略す）は、まさに理性と感性の両面からアプローチして、問題の全体像を把握し、真理の探究に結び付ける技法である。この技法はB SやK J法と一部で共通性を有するものの、新たな技法である。また、脳生理学的には左大脳半球（言語能力）と右大脳半球（感情能力）の機能を統合する技法とも言える。

#### **（4）共創空間開発技法：「価値自由」を実践するイノベーション技法—共創知（異質な知）によるマインド・セットのカイゼン技法**

ここでは、方法論としての共創空間開発技法について、①なぜこの技法が必要なのか、②これまでの技法と何が異なるのか、③CSD 技法において、どのように「共創知(Co-Creative Wisdom)」によってマインド・セットをカイゼンできるのか、④CSD 技法を実践した成果と直面している課題とは何か、という4点について論ずる。

##### **①なぜCSD 技法が必要なのか**

CSD 技法が今必要とされている理由とは、「共創空間」で1) “気づかない” ことに対する気づきが生み出され、2) 共創力や価値判断能力を高めることができるだけでなく、3) 自己中心的価値判断の危険性に気づき、そこから脱却する自由—自己解放の機会—があることを知ることができるからである。

##### **1) “気づかない” ことに対する“気づき”が生み出される空間**

我々は、日々の生活において、他人のことは目についても、案外自分のことについては“気づかない”ことが多い。また、その逆もまた然りである。しかし、この事実を何ら問題とも思わず、別に意識もせず、行動することに対する危険にあまりにも無防備である場合が多い。というのは、“気づかない”で行うことが惰性となり、自分自身の思考停止を招くだけでなく、他者を傷つけることにもなりかねないからである。

そもそも、誰が“気づかない”のであろうか。コミュニケーション論や自己分析でよく知られているジョハリの窓（Johari window）<sup>3</sup>を基準にすれば、誰が“気づかない”のかという問題については、3種類の自己が存在する。第1は、（自分は気づいていても）他者が気づかない「隠された自己（秘密の窓）」（hidden self）であり、第2は、（他者が気づいていても）自分が気づかない「盲目の自己（影の窓）」（blind self）、第3は、他者も自分も気づかない「未知の自己（闇の窓）」（unknown self）が存在する。

技法としての「共創空間」は、こうした“気づかない”自己に対して気づく空間を提供する。第1の「隠された自己」は自由意志に基づく自己開示<sup>4</sup>によって、また、第2の「盲目の自己」は、「共創空間」に同時に存在する他者に対して“聴く耳”を持つことによって自他ともに気づくことが可能となる。

しかし、第3の「未知の自己」は、自己開示や他者に対する聴く耳を持ってしても、“気づかない”領域である。どのような領域であるのか。共創空間では、参加者の意見にある一定のバイアスがあり、どこかの象限に集中してしまい、他の空間には意見が不在となる領域をさす。

ボストン・コンサルティング・グループ（BCG）の太田直樹〔2013〕は、参加者の意見が集中し、同質化してしまうという「同質性の罟」<sup>5</sup>を指摘すると同時に、意見が不在な領域を「ブラインド・スポット」として“異質の知”を発見できる重要性を力説している。

“異質の知”について、例えば、前節の理論的意義の価値判断問題の例として登場した「（好きな）音楽を仕事（職業）とする」場合の理想もしくは理念について考えてみよう。その理想とは、自分の好きなことを仕事にするというマズロー流の「自己実現」欲求にある、という立場に立つとする。この立場の価値観を擁護する者が自分だけではなく、他者も取るとすると、この立場に集中し、その真逆の領域は「未知の自己」の領域となる。共創空間にこの「気づかない」領域（ブラインド・スポット）が出現すれば、この領域にある（気づかない）価値観について考えるチャンスが生まれる。音楽を仕事とする例では、作曲家バッハの理想・理念がこの領域にあることに気づかされた。即ち、バッハの作曲活動の背後にある理想とは、自己実現ではなく、音楽を通して唯一の救い主であるイエス・キリストを紹介することであり、自己の栄光を求めていなかったことが知られている。

以上のことから、第3の「未知の自己」は共創空間に登場している“自己開示する自己”

---

<sup>3</sup> サンフランシスコ州立大学の心理学者ジョセフ・ルフト（Joseph Luft）とハリー・インガム（Harry Ingham）が発表した「対人関係における気づきのグラフモデル」（1955年）のことを後に提案した2人の名前を組み合わせ「ジョハリの窓」と呼ぶようになった。

<sup>4</sup> 自己開示したくない場合でも、二次元空間の原点に置くことによって開示できる。

<sup>5</sup> 太田〔2013〕によれば、「同質性の罟」は、日本人中心で、社歴が長く、男性が圧倒的に多い同質的な日本企業が陥りやすいとして、次のように指摘している（同上、84ページ）。このような組織・集団は「見たいものしか見ない」リスクを抱えている。「見たいもの」とは、たとえば、得意な技術を発展させた商品ロードマップや、過去に成功したビジネスモデルである。したがって、イノベーションのジレンマに陥りやすく、また変化適応力（adaptive advantage）も低いままである。

を手放し、その領域にはない“異質の知”に目を向けることによって、“気づき”が生み出されることとなる。

## 2) 共創力や価値判断能力を高める空間

コンピューターやスマートフォンに代表される大量情報消費社会は、クリックすることで自らが欲する情報を瞬時のうちに手に入れることを可能にした。しかし、同時に、人との直接的接触を避けネット空間に潜り込むヴァーチャル型人間が生み出されているだけではなく、情報過多で麻痺する人間や情報の良し悪しを判断することが困難となり、価値判断能力を低下させていることが危惧される<sup>6</sup>。

テンプル大学神経意思決定センターのアンジェリカ・ディモカ所長によれば、情報が多過ぎると、人間の思考回路はうまく働かなくなることを実証的に明らかにしている<sup>7</sup>。また、「選択」問題を科学的に研究しているコロンビア大学経営大学院のシーナ・アイエンガー[2010]も、企業年金に関する資金運用の研究において、情報が多過ぎると、判断力を麻痺させ、選択を放棄する（判断力の低下）ことを実証している<sup>8</sup>。

こうした情報洪水のなかで、判断力が麻痺し、低下している現実に対する解決策（ソリューション）となるのがCSD(共創空間開発)技法と言える。では、どのようにすれば、共創空間にて、「価値判断できない」状態から価値判断ができ、かつ最善の判断をするヒントを掴むことができるようになるのだろうか。

この問題に対する解決策とは、自分で判断できない場合だけではなく、自分で判断できる場合にもあてはまる。まず、自分で判断できない場合である。この場合、共創空間に登場した他者の判断の仕方、根拠からヒントを得ることができる。例えば、共有されているテーマが音楽であり、その音楽の悪い部分についてその理由がわからず自分で判断できない場合でも、そう判断している他者の意見を傾聴し、ヒントを得ることができる。

それでは、自分で判断できる場合はどうか。この場合でも、というより、むしろ自己判断する場合の方こそ共創空間が必要である。なぜならば、自分が正しいと思って判断することは、必ずしも最善とは限らないだけではなく、誤った方向と気づかずに暴走する危険もあるからである。それ故、この空間で自己による判断を客観的に共創知によって吟味こ

---

<sup>6</sup> シャロン・ベグリー[2011]は、最近盛んになっている意思決定の研究から、人間は情報が増えると、客観的に見て最善とはいえない選択や後悔する選択をする可能性が高まると指摘している。判断力が麻痺することについては、情報の伝達方法が多様化し、伝達の頻度も増えるにつれて、大量の情報を吸収しようとする脳が認知作用が麻痺することが明らかとなり、特に正しい決断をくだす能力に打撃を与える、と指摘している（[2011]、42 ページ）。

<sup>7</sup> ディモカらの研究によると、例えば、次の休暇の旅行先を決めるとき、さまざまな旅行情報サイトをチェックしたら、いろいろな情報があり過ぎて考えるのが面倒になり、旅行自体をやめてしまうという。詳しくは、シャロン・ベグリー[2011]、40～42 ページを参照されたい。

<sup>8</sup> アイエンガー[2010]によれば、企業年金について選択肢（入手可能な情報）が増えるほど、加入率に悪影響を与え、下がることを示した。具体的には、選択肢が4（ファンド数4本のプラン）から12（ファンド数12本のプラン）に増えると、加入率は75%から70%に下がり、さらに59（ファンド数59本のプラン）に増えると、約60%へとさらに下がった（同、241～243 ページ）。

とが大切であり、吟味することによって価値判断能力を向上させることができる。例えば、好きな音楽は無意識のうちに良いもの、あるいは正しいものとして判断して（思い込んで）いるものである。ある音楽を好きになる。そこに理由はないとよく言われるが、気づいていないだけで、良い点もあれば、悪い点もあることに気づいていない場合が多い。従って、自己判断バイアスをチェックするためには、他者との共創空間において、判断基準そのものを変えてみるのが大切である。音楽の例では、好き嫌いという判断基準だけではなく、善悪の基準などにも目を向け、自分の価値判断のモノサシを変えること、そして他者の意見に傾聴するプロセスを体験する。この共創知の体験によって、共創力を身に付け、価値判断能力を高めることができる。

### 3) 自己中心的価値判断から脱却する自由を発見する空間

CSD 技法によって、「気づき」が与えられ、共創力や価値判断能力が向上するだけではなく、人間の根源に関わる問題と向き合う空間である。なぜならば、「共創空間」を開発することによって、価値判断の自己中心性という根源的問題—ウェーバーの価値自由の問題—に対する解を提供する空間だからである。

他人任せにして自分の考えを持って判断しない若者が増えているという指摘がある。一見自己中心的でないようにみえるが、実は自己主張、自己表現を回避し楽をしようとする自己中心的な判断をしている自己が存在する。もっとも、この現象は、若者だけに限ったことでもなく、ある特定の文化や時代に限定されるものでもない通底的な問題である。たとえ、自分の考えや価値観を持って判断したとしても、判断するのは自分であり、自分を起点としているところに自己中心性という問題の核心が横たわっている。

これは当然のことで議論の余地がないと思われるかもしれない。しかし、「問題ではない」と考えていること、あるいはそう感じていること自体に実は隠された本質的な問題がある。なぜならば、自分の考え方や感じ方は絶対でもないのに、絶対化し、完全でもないのに完全と思い込んでしまい、それが危険な罠であることに気づいていないからである。

そもそも、価値判断において、中立的となり、ウェーバーが指摘したような価値自由（前節、3 ページ）は可能なのだろうか。価値判断において自己中心性が存在するとなれば、中立的とは言えない、つまり価値自由ではないことを意味する。

この価値判断の自己中心性問題について、自己中心性は存在することを実証した注目すべき遠藤由美[2007]の研究がある。この研究によれば、大学の講義で実施する期末試験のやり方の成績への影響について、自己と他者では同じ判断をする（中立的）という帰無仮説を立てて統計的に検証した。その結果、両者には有意差が存在し帰無仮説は却下され、価値判断に自己中心性バイアスがあることを確認している<sup>9</sup>。

---

<sup>9</sup> 遠藤の研究[2007]によると、試験問題を予告するなどクラス内の人々の成績に共通して関連する共有状況を提示したとき、有利状況（例えば、試験直前の週の授業中に、試験問題を予告する、など）では、自分の相対順位を押し上げるように、また不利状況（例えば、試験は全範囲から出題する、など）では、自分の相対順位を下げるように判断し、共有状況における自己中心的判断バイアスを確認している。詳細については、同上論文[2007]134-143 ページを参照のこと。



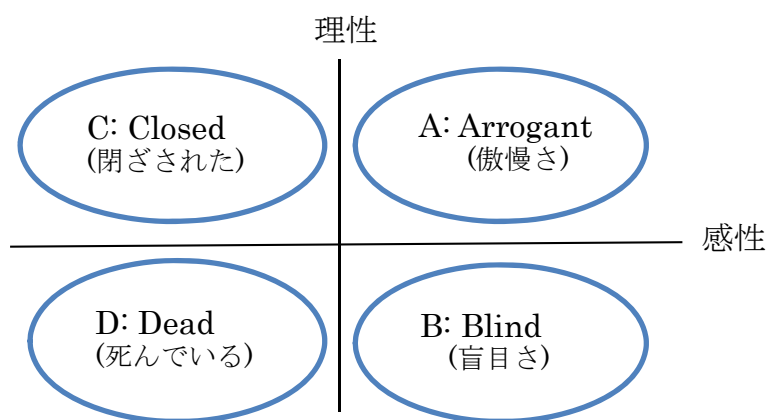
遠藤の研究で採用している自己中心性 (egocentrism) とは、自分の思考や感情、感覚などに関する自己関連情報と他者関連情報の処理のされ方の違いの結果生じるバイアス (同上[2007]、135 ページ) であることを指摘している。従って、通常“自己中心性”と聞いてイメージされる自己利益優先主義とは異なるが、この主義をも包摂するより広い概念である。つまり、仮に自己利益優先主義でなくても、自己中心性バイアスが存在していることとなる。このバイアスの所在は、共創空間で使用するマグネット (後述する自己表明の道具) によって確認することができる。

ではなぜ、この自明とも思える自己中心性バイアスが問題なのだろうか。それは、この問題とは前述の「ブラインド・スポット」と言われる暗黒領域にあり、自己にも他者にも闇となっている人間の本質にかかわる重要な問題だからである。

この問題を解く鍵は聖書にある。なぜならば、聖書には天地万物を創造した神の言葉が書かれてあり、そこには人間の自己中心的な生まれつきの姿が示されているからである。この人間が持つ自己中心性という性質により、無意識のうちに自分勝手な判断をしてしまうが、聖書では、これを罪 (SIN) と呼んでいる。従って、この罪とは法律上の罪でもなければ、罪の西欧文化とか恥の東洋文化とかいった、文化次元の問題でもなく、すべての人類が持っている根源的な性質 (「大場裕之＋「共創空間」開発プロジェクトチーム[2015]、260～261 ページ、H. Oba [2011]、80 ページ) をさし、創造主なる神から離れている状態をさす。

こうした自己中心性バイアスを有する価値判断は、どのようなマインド・セット (経験・教育・先入観などから形成される思考様式、心理状態) をもたらすだろうか。図表 1 には、感性軸と理性軸からなる人間のマインド・セットが示されている。罪と呼ばれる自己中心性 (自分勝手な判断) は、傲慢さ (Arrogant)、盲目さ (Blind)、閉ざされた心 (Closed)、そして死んでいるような状態 (Dead) のマインド・セットとなる。

図表 1 「自己中心的価値判断」がもたらすマインド・セットとは？



出所：聖書 (新改訳) をもとに筆者 (大場) 作成。

A ゾーンの「傲慢なマインド」とは、自慢や心の高ぶりであり、自分の判断は常に正しいと思って行動するマインドであり、律法的となり、他者を支配するだけではなく、暴力を生みだすことにもつながる。B ゾーンの「盲目的なマインド」とは、まわりや方向性が見えなくなることであり、一人よがり、周りを見ないで、突進するタイプのマインドであり、その道とは滅びの道であることに気づかない。C ゾーンの「閉ざされたマインド」とは、他者に対して冷淡・無関心となるマインドである。他者との間に壁をつくり、居心地の良い自分の世界で生きる、快楽的・現実逃避的なマインドであり、他者に対して無関心となる。D ゾーンの「死んでいるマインド」とは、自己愛と頑な心をさし、自分しか愛せないという孤独な暗闇に覆われた心であり、虚無感漂う、希望なきマインドである。

我々の価値判断に潜んでいる、この恐るべき自己中心性バイアスの存在を、共創空間にて体験的に知ることができる。日常的に価値判断している我々のマインドとは、自己中心性バイアスと呼ばれる罪に対して無感覚となっているだけではなく、上述のような危険性に対しても無防備となっている。

自分が他者のためによかれと思って判断して行っても、その他者はそう思わず、かえって悪しき事と受け止められてしまい、みじめな思いをしたことは誰しもよくある。その結果、後悔の念に捕われる。反対に、自分が行ってうまくいった場合でも、高ぶりや傲慢となるリスクが高くなる。また、自分の考えをもつことはよいとされる。よく若い世代は自分軸を持っていないと言われ、もっと自信を持てという声も耳にする。しかし、自分軸をもつこととは、自分の価値観や生き方、信念というものにこだわり、頑なマインドとなり、その思想に囚われてしまう危険性を伴っている。これらはすべて自己中心的マインドの現われと言える。

果たして、このようなマインドから脱却することは可能なのだろうか。この問いに対する真実とは、人間のいかなる努力（科学や宗教を含む）をもってしても不可能であるが、神に対して、自己中心で自分勝手（我儘）に生きてきたことを悔い改めて、神の永遠なる愛をいただくことによって、可能となる。これを「救い」という<sup>10</sup>。神の愛とは、聖書に示された愛であり、十字架の愛である。十字架の愛とは、イエス・キリストの犠牲の愛であり、この愛を得ることによって、個々の罪だけではなく、生まれつきの自分（罪人）から解放され、死からいのちへと移され、日々新たないのちをいただける。この真実は、キリスト教という人間の作った宗教組織に入ることやその教えを信ずることとは全く無関係である。この真理（神の愛）を受入れるか否か、すべて我々の自由意志に委ねられている。

---

<sup>10</sup> イギリスのキリスト者であるオズワルド・チェンバーズ[1990]は「救い」について、以下のように述べている。救いとは、単に罪からの解放や、個人的なきよさを経験することを意味しない。それは、私が自分自身から解放されて、神と一つにされることを示す。・・・救いとは、神の御霊が私を神の人格に触れさせ、そのため、私が自分よりも無限に偉大な何ものかによって絶えず感動させられることである。つまり、私が神にすべてをゆだねることを意味する（同上、78ページ）。

まさに、人間は自分で自分を自由にすることはできず（その帰結は死）、真理である神の愛がこの自己中心的な性質を持つ自分（すべての人間）を罪から自由にする。

## ②これまでの技法と何が異なるのか

「共創空間」および CSD 技法と言う聞きなれない言葉にも少し関心を持っていただけたのではないだろうか。気づかない”ことに対する“気づき”が生み出され、共創力や価値判断能力が高められ、自己中心的価値判断から脱却する自由を発見できるユニークな空間である。この空間とは、端的に一言で表現すれば、ウェーバー流の「価値自由」を実現する知のイノベーション空間であり、共創知（異質な知の集まり）によってマインド・セットをカイゼンする技法と言える。

この点こそが CSD 技法をしてこれまでの技法と決定的に異なる点である。勿論、これまでの技法と共有する部分もあるので、何が同じで、何が異なるのか、技法的に位置づける必要がある。その前に、「価値自由」を実現する知のイノベーション空間とは、どんな空間なのか、これまで実際に体験して得られた知見とは、以下の3点である。

- 1) 固定観念を一旦融解する空間（既成概念にこだわらない自由）。
- 2) 「分かりやすい答え」を早急に求めない空間（吟味し、会話する過程を活かす自由）。
- 3) 複数の視点から、ものごとを見る空間（共に新たな考えを創出する自由）。

こうした CSD 技法による知見は、情報化社会の中で価値観が多様化し複雑化すると同時に、科学技術が高度化かつ専門化した現代において求められている。一人単独の価値観や研究開発だけでは優れた成果を生み出しにくい時代環境において、共創的発想や共創マインド（心の持ち方）を生み出す新たな知の技法が求められる由縁である。

先に述べた伝統的な BS 法と KJ 法は、自由な発想と平等な扱いのもとで、多人数によって多数のデータを集めて発想する技法であり、優位性があると言える。しかし、1) 合意・共有化された共通の基準（判断軸）が欠落していること、また 2) 人間の理性と感性を明確に区別しているわけではない。この技法的な問題を解決するのが、CSD 技法であり、1) 共通の判断軸を発見・共有化する具体的かつ本質的な「価値自由」の技法、2) 頭と心をつなぐ技法、3) 関連性を発見する技法、4) 自己中心性バイアスに気づく技法、という4つの基本的な特徴がある。

CSD 技法は「人間はものごとを考えたり感じたりする生き物で、理性基準と感性基準の両者を併せ持つ存在である」との認識に立脚して、問題とするテーマに対して理性と感性の両面からアプローチして成果を生み出す技法なのである。まさに「共創」とは、理性と感性を総動員して、複数の人が考えや思いを出し合い“会話”（キャッチボールと呼んでいる）を重ねて、「知らない」ことに気づき、新しい考えや思いを共に創出することである。そのような共創の場・スペースを創出することこそが「共創空間開発」の意図するところである。

こうした「価値自由」を実現するイノベーション技法—共創知によるマインドセット・

カイゼン技法—とは、前述したような論理至上主義的技法でもなければ、ある特定の個人の知が優先される技法でもない。それ故、これまでの技法となぜ異なるのか、この技法上の違いをより明確にするためには、どうしても、「価値自由」を実現する共創知によるマインドセット・カイゼン技法とは何か、そしてその中に含まれる「知」とは何かという根源的な問いに向き合う必要がある。

まず、最初に共創知によるマインドセット・カイゼン技法であるが、「共創知」とはいかなる概念なのだろうか。この概念は、個を超えた集団の知としての「集合知」に近い。西垣通[2013a]は、「集合知」について、広義では、アリやハチなどの生命体の群れのなかに宿る知のことである、と指摘している（同[2013a]、19 ページ）。ただ、「集合知」と言っても、インターネット世界を想定し個人を超えた集団の持つ知性や知能を示す“集団的知性（collective intelligence）”<sup>11</sup>と、人と人との「生きた結びつき（リビング・コネクション）」を重視する A. ブリスキン他[2010]の“collective wisdom”がある。「共創知」は後者の“collective wisdom”により近い概念である。“collective wisdom”についてブリスキン他は、単なる「頭のよさ」ではなく、また個人でもない集団の知の性質を表現しているとし、深い思いやりと共感に根ざした洞察、良識、明晰性、客観性、見識によって発揮されると述べている（同[2010]、20、53 ページ）。

ブリスキン他[2010]によれば、「集合知」とは“集団やコミュニティ内での相互作用を通じて獲得される知識や洞察”と定義し（同上、22 ページ）、「集合知」を開発することの重要性や緊急性を指摘している。同時に、この本の中には「無限の共創力」というタイトルの章（第7章）を設けていることにも注目される。

まず、集合知の重要性および緊急性とは、「衆愚の罠<sup>12</sup>」と呼んでいる集団が陥る罠に気づくだけではなく、力を尽して集合知を伸ばした集団は、自分たちの成果から劇的なほど大きな効果を導くことができる（同上、7、32、37 ページ）ことにあると指摘している。

また、「無限の共創力」とは、集合知の持つ治癒力、創造性、紛争解決力を発揮してイノベーションや変革を実現した集団やその資質をさしており、事例<sup>13</sup>を挙げて紹介している。

---

<sup>11</sup> ネット集合知とは、インターネットを利用して見ず知らずの他人同士が知恵をだしあって構築する知のことを意味している。西垣通[2013a]、20 ページを参照のこと。

<sup>12</sup> 衆愚（folly）とは、集団が陥る愚行（暴力）をさし、単なる愚かさから生じた行動から悪意のこもった行動までを表現する。衆愚となるには2つのパターンがある。ひとつは、分断と細分化の動き。集団の構成員が、「身内ではない」「私には関係がない」とみなす発想で、集団内の他の構成員、または他の集団に抵抗を示す。分断と細分化は、人を「極性化（ポラリゼーション）」に引き込み、自分の信じるものと異なる考えや人間を・・・拒絶し、暴力を含めたいかなる排除も善（よし）とし、「身内への脅威」だと表明したりする。もうひとつは、合意の幻想、即ちいつもの合意、見せかけの団結への動き。このパターンにおいて、集団の構成員は沈黙と服従を選ぶ。集団内の不一致を明らかにするよりも、団結の幻想を守りたいと考える。詳細については、ブリスキン他[2010]、145～148 ページを参照のこと。

<sup>13</sup> 『ナルニア国物語』や『ホビット物語』、『指輪物語』を生みだした「インクリングズ」という同好会の事例、癌と診断された女性や親しい友人によるヒーリングコミュニティの事例、漁師と環境保護主義者と企業経営者が組織的に和解して形成された「北西大西洋海洋連合（NAMA）」

この中で、共創する（コークリエイト）力は、集団の構成員が安心感と問題意識の両方を持って、自分の中の最高のもの、また集団の中で集団にとっての最高のものを見つけようするときに生み出されるとしている（同上、38 ページ）。

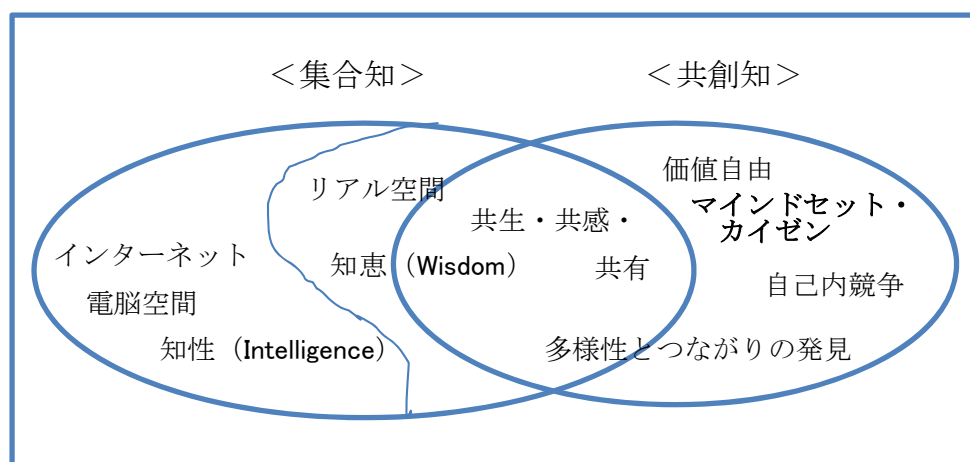
以上のことは、「共創知」が「集合知（collective wisdom）」と共有すべき部分が多いことを示しているが、それでは、こうした「集合知」と一体何が異なるのだろうか。

図表 2 には、インターネット世界も含む広義の「集合知」と「共創知」との共通点と相違点について図式化している。

共通点とは、A. ブリスキン他[2010]が指摘しているように、「知」は開発できるものであること、「知」は少数の頭の良い人物のものではなく、すべての人々のものであること、そして成果は長期にわたり持続することである（同上、5～7 ページ）。

相違点とは、3つある。第 1 は、集合知という概念自体は価値中立的な印象が拭えず、価値づける必要があるが、共創知の場合、その言葉自体に明確な理想・理念が示されている点である。第 2 は、集合知にはない、異質な知を共生・共有化できる「価値自由」な空間を具体的に創出する点である。この具体的な進め方については次の節で紹介する。第 3 は、価値判断に自己中心性バイアスが存在することの危険に気づき、他者の考え方や感じ方に傾聴しながら、自己内における様々な自分を競争させ吟味し、取捨選択できる自由意志がある点である。この場合、「他者」には、参加メンバーだけではなく、大きな存在（神）も含まれている。つまり、共創空間とは、同次元に存在する「他者」だけではなく、人間を超えた高次元で今も生きて存在している絶対的な「他者」に対して開かれた空間である。

図表 2 「集合知」と「共創知」の共通点と相違点



出所：ブリスキン他[2010]、西垣通[2013a]、大場裕之＋「共創空間」開発プロジェクトチーム[2015]などをもとに筆者（大場）作成。

の事例、癒しの力、想像する力が、仕事やコミュニティと結びついた南アフリカの「コミュニティおよび個人開発協会（CIDA）」の事例、愛によって支えられたコミュニティであるアメリカ・カリフォルニア州オークランドにある非営利団体「難民・移民支援センター（CERI）」の事例など。事例の詳細については、ブリスキン他[2010]、192～208 ページを参照のこと。

この価値判断の自己中心性バイアスの正体は「罪」と言われるものであるが、我々をも含むあらゆる人間が該当する。人間誰しもが、自分の考えや思いこみの境地に入りきって、他者の考えや思いを排除する欲求を持ち、知らず知らずの内に自己独裁の境地に陶醉してしまう性質を持っている。共創知による技法とはこの自分勝手なマインド・セットをカイゼンするために特に有効である。

そもそも集合知と共創知の共通項となっているである「知」とは一体何か。小林康夫他[1998]の『新・知の技法』によれば、知とは（知するという）行為であるとして、以下のよう<sup>14</sup>に指摘している。「知を行為というアスペクトで見ると、そこにはある共通した核のようなものがある。・・・その核とは、・・・知の世界のなかにいる誰もが身につけている一般的な技法や作法あるいは方法として具体化されている・・・そのような技法や方法は、決して単なる技術的なものに留まらず、そのうちにこそ、学問的な知の本質も理想も根付いている・・・学問が「普遍性」をその理想的な判断基準とする特別な言語行為であり、いわゆる「反証可能性」<sup>14</sup>を踏まえたものでなければならない・・・また、その議論を通して、知の行為とはなによりも、たえずより普遍的なものへと向かう他者との対話に対して開かれたものでなければならないこと、またとりわけ「公平さ」と「創造性」が重要である・・・」（同上、3 ページ、下線は筆者）。

この中で、知の本質とは「普遍的なものへと向かう他者との対話」であることを指摘している。しかし、キーワードである普遍性が何を指すのか、曖昧であり、この点では『新・知の技法』の4年前に出版された小林康夫他[1994]の『知の技法』でも同様である。この『知の技法』では、「自我の立場に立って考えるのではなく、普遍性の立場に立って考える」と主張する一方、「普遍性は、あらかじめ存在するものではなく、それに到達し、それを獲得することをわれわれが目指すべき地平のようなもの」と普遍性の捉え方に整合性がない（同[1994]、4 ページ）。確かに、『知の技法』では、公正さに基づいた創造性こそが（大学という場で学ぶべき）文科系の（知の）技法の最終的な目的（同[1994]、13 ページ）であることを提示した点で評価できる。しかし、知の本質とされる普遍性については依然、曖昧性が残ると言わざるを得ない。

もっとも、小林康夫編著[1998]の『学問のすすめ』では、普遍性から一歩突き進んで、「統一性」と「秩序」という概念を登場させ、知の形態としての学問について以下のように述べている。「・・・世界を知り、人間自身を知ろうとする学問の営みの全体は、モノの秩序から人間のコトバやココロの秩序に至るまでの世界の深い統一性の解明に向かう広大なプログラムである・・・。学問を通じてはじめて触れることのできる世界の驚くべき、汲み尽

---

<sup>14</sup>小林康夫・船曳建夫編著[1994]では、カール・R・ポパーの「反証可能性」(falsifiability)について、以下のように述べている。どのような知の言説も、同じ知の共同体に属する他の研究者が、同じ手続きを踏んでその記述や主張を、再検討し、場合によっては、反論し、反駁し、更新するという可能性に対して開かれていなければならない（同上、4 ページ）。

しがたい豊かさがある。その豊かさに触れ、その豊かさから学ぶためにこそわれわれは学問をするのであり、そこで開示される一原理上は誰にでも理解可能な一世界の限りない深い統一性を多くの人と分かちあいたいからこそ、われわれは学問をすすめる・・・」(小林康夫編著[1998]、12、15 ページ)。しかし、残念ながら、ここでも提起されている知の本質と考えられる「限りない深い統一性」とは一体何か、依然不明のままである。

J. カルファ[1997]の『知のしくみ—その多様性とダイナミズム (What is Intelligence?)』では、知を説明する道は 2 つあるとして、以下のように指摘している。ひとつは、知というものは非物質的実在である靈魂によって支配されている存在のみがもつ能力(言語を用いたり、道具などを作る能力など)とする「二元論者」の道である。この立場に立てば、知というものは自然を対象とする決定論的な科学(自然科学)の研究対象ではなく、自然とは異なる、あるいは全面的に自然に属するのではない存在である人類・天使・神に関する学(自然科学を超えた学: 形而上学)の対象でなければならないとする。もうひとつは、科学への接近法が数学的なそれに統一されるという事態を迎えるに至って、知というものは自然界の中の単一の種、すなわち人類、の特権的専有物とする道である(J. カルファ[1997]、2～5 ページ)。

この知に対する 2 つの道(アプローチ)から、知の本質とは、人間を超自然的な存在と捉えるか、あるいは自然的な存在と捉えるか、という存在論的な問いかけ(「人間とは何か?」)に横たわっていることがぼんやりと見えてくる。しかし、我々はこの問いそのものに拘泥することなく、人間と知との関係、知の本質の問題についてさらに論究してみたい。

人間には知性、知覚、知恵、知識などの知が備わっている。J. カルファが指摘するように、「知」とは人間の存在そのものかもしれない。なぜなら、人間の学名はラテン語の「ホモ・サピエンス (Homo sapiens)」であり、その意味は‘wise man’、つまり“知恵のあるヒト”をさすからである。

それでは、知的な存在としての人間について、聖書では、どのように示されているのだろうか。そもそも、なぜ聖書なのか。聖書とは、真理を知る書物であり、神の溢れるばかりの知恵と知識が書かれてあるからである。従って、次のような問いかけ: 1) 知を有する人間はどこから来てどこへ向かっているのだろうか、また、2) そもそも知(知恵もしくは知識)の始まりとは一体何か、という根源的な問いに対する答えも聖書に書かれてあるからである。

まず、最初の問いについては、「ちりはもとあつた地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る」(伝道者の書 12 章 7 節)と人間はちり的であり、かつ霊的な存在であることを知ることができる。そして、「・・・すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至る・・・」(ローマ人への手紙 11 章 36 節)と人間の出自と行き先がはっきりと示されている。

もうひとつの問い—知の始まりとは何か—については、「・・・知恵はどこから来るのか・・・見よ。主を恐れること、これが知恵である。」(ヨブ記 28 章 20、28 節)、「主を恐れることは、知恵の初め。」(詩篇 111 篇 10 節)、「主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知

恵と訓戒をさげすむ。」(箴言 1 章 7 節) とある。この“恐れる”とは、畏敬の念をさし、エミー・カーマイケル[1989]は、きよさのこもった愛で裏打ちしてある深い恐れ、と指摘している(同上、67 ページ)。筆者(大場)は、1991 年イギリスにて初めて大学教育に携わったが、日本を旅立つ直前に、上述の箴言の言葉に触れた衝撃を昨日のように覚えている。「知識の始まりとは」という問いも発したことがなかっただけではなく、その聖書の答えが「主(すなわち神)を恐れること」とあり、全くの想定外であり、目からウロコの状態だったからである。

まさに自分のような人間こそが愚かな人間に他ならない。神の知性と対比したとき、人間の知性とはどのようなものなのだろうか。聖書では次のように警告している。「・・・もはや、異邦人(イエス・キリストを知らない者)がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは、その知性(understanding)において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。」(エペソ人への手紙 4 章 17, 18 節) ここでいう“神のいのち”とは“永遠のいのち”である。それでは、“永遠のいのち”とは何か。それは、「・・・永遠のいのちとは、・・・唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを(体験的に)知ること」(ヨハネの福音書 17 章 3 節) である。この永遠のいのちを求めるか否かは、まさに我々の自由意志に託されている<sup>15</sup>。

### ③どのように「共創知 (Co-Creative Wisdom)」によってマインド・セットをカイゼンできるのか

共創空間開発技法—共創知 (Co-Creative Wisdom) によるマインド・セットのカイゼン—を実践する具体的な道具やステップについて紹介する。参加者の考えや思いを分かり易く「見える化」するために、3 つの道具を用意する。**ボード**(白板)、**マグネット**(磁気性の

---

<sup>15</sup> “よい・悪い”という善悪に関する絶対的な価値判断、決定権は人間ではなく、神にある。そして、神の判断は人間の判断とは全く異なる。なぜなら、人は自分の欲望を満足させるために求める。しかし、神の目からすると、それは自己中心という悪い動機で求めているという判断をしているからである。この点を指摘したのは、オズワルド・チェンバーズ[1990]である。彼は、「捜しなさい。そうすれば見つかります。」という聖書(新約、ルカの福音書 11 章 9 節)の言葉に耳を傾ける必要性について、以下のように語っている。・・・あなたの関心をこの一点にしぼれ。あなたは、心から神を求めたことがあるだろうか。それとも、無関心なままだろうか。いままでの体験にあぐらをかき、それ以上神を求めないでいるのではないか。体験はやがて過ぎ去る。このような体験の上に築かれているあなたの信仰に注意せよ。それは、いつしか厳しく探られ、試される。それゆえ「たたきなさい。そうすれば開かれます」。「神に近づきなさい。」戸は閉じられている。だから、たたきなさいとある。たたいた時、胸がドキドキすることだろう。「手を洗いきよめなさい。」少し大きくたたくと、自分がいかに汚れているかがわかってくる。「心をきよめなさい。」今度は、本気で、しかもさまざまな努力をしてきよくなろうとするだろう。「悩みなさい。」あなたの心は神の前で悩んだことがあるだろうか。自己憐憫に陥るのではなく、そのような自分を発見して胸の張り裂けるような悩みに驚くのである。「謙遜になりなさい。」神の戸をたたくことは、私たちを謙遜にさせる。私たちは、十字架につけられた盗賊のように、たたくべきである。「たたく者には開かれます。」(同[1990]、168 ページ)



吸盤)、**ボール** (軽い球) の3つである。各々の意味は、ボードとは自己発見の鏡、複数のマグネットとは、価値判断する自己の集合、ボールとは命題＝問いであり、非暴力のシンボルとなる。これらを使って、以下のステップ1～8の順序で進める。

**【ステップ 1】** 共創するための「設問 (問いかけ)」づくりから始まる。どの設問にするか、合意形成するために、ボールを回しながら、進行役がリードする。参加者の話合いによって決めるか、主催者が決めるか、いずれでも良いが参加者に関心があり理解しやすく納得することが条件である。この条件が満たされないと、あとに続く自由闊達な発言が期待できない。決められた設問 (テーマ) はボードに書く。

**【ステップ 2】** 創出する場づくりとして、縦軸と横軸が交差するマトリックスをボードに描く。ガイドラインとして、縦軸は理性軸を想定し、横軸は感性軸を想定する。

**【ステップ 3】** 軸の上下と左右に、設問に答えるための判断基準となる言葉を書く。

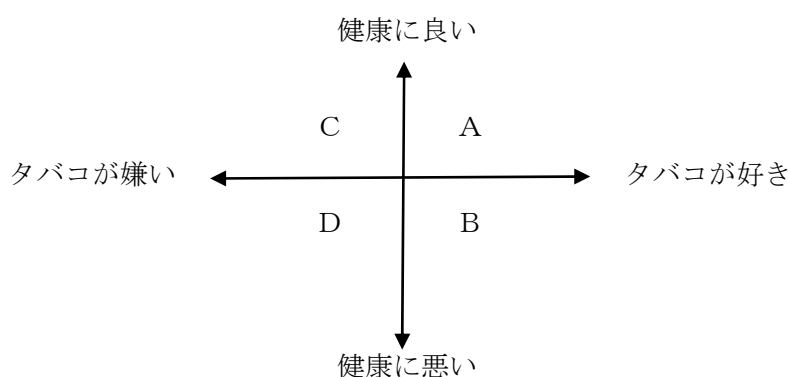
縦軸は基本的には理性的な判断をする軸を立てる。例えば、「善い/悪い。正しい/正しくない。必要/不要。利益/不利益。肯定/否定。大きい/小さい。可能/不可能」などを表現する言葉を縦軸上の上と下を書く。

横軸は感性軸として「好き/嫌い。満足/不満。欲する/欲しない。快/不快。明/暗。信/不信。愛/憎。清い/汚い」などを表現する言葉を横軸上の右と左を書く。

**【ステップ 4】** マトリックスの象限ごとに、右上の第一象限から右回りでA・B・C・Dの記号を書く。

以上でマトリックスと言う「場」が完成する、これを「**共創マトリックス**」と名付けている。簡単な例示で共創マトリックスを示すと、図表3の通りとなる。

図表3：問い「タバコを吸うことについて、どう思うか」



**【ステップ 5】** 参加者はこのボードを見て、しばし考える。そして、考えた結果を、当てはまる位置 (A・B・C・Dのどれか) にマグネットを置く。

例えば、「タバコは健康に悪いが好きだ」と思う人は、Bゾーンに置くことになる。

この例示では、設問を簡単にしたので当てはまる位置を即断できるが、設問によっては判断が定まりにくいケースもある。その場合は、ABの境界線上やBD、CD、CAの境界線上を選択することも個人の自由意思に任せられている。また、判断を留保する場合はマトリックスの中心点に置いてよい。迷った場合は、取りあえず何処かに置いて、議論の過程で定位置を決める。

かくして、参加者には9つの選択肢（4つの象限、4つの境界線、および中心点の合計9つ）がボードに用意されているので、参加者の自由意思が最大限に尊重される。この点が、賛成か反対かの二項対立で意見を述べる一般的な意思表示と大きく異なるのである。

**【ステップ 6】** 全員がマグネットを置き終わると進行役が、最初の発言者を決めてボールを渡す。ボールを受けた人は、マグネットを置いた理由や思いを話す。他の参加者は、質問は許されるが他者に対する批判や反論は暴力となりやすいので禁止。聞き役に徹する。話し終わったら、次の発言者を指名してボールを渡す。このように順番にボールを回して、全員が発言する。発言内容の要点・キーワードを進行役がボードに記入する。各参加者は必要に応じて各自メモをとる。

**【ステップ 7】** 全員の発言が終わったら議論（意見を述べあい論じあう）を始める。ここで重要なことは、参加者はボード全体を眺めて、自分の意見・他者の意見という区別から離れてボードに表現されたすべてを全員の共有物・共有財産として客観的に受止める。質問や意見を述べる人は、必ずボールを受け取ってから発言する。共創ルールとは、自分の意見を述べることに徹して、特定の人への批判攻撃は禁止とする。攻撃をドッジボール的と例えるなら、ここでの意見交換はキャッチボール的と言える。

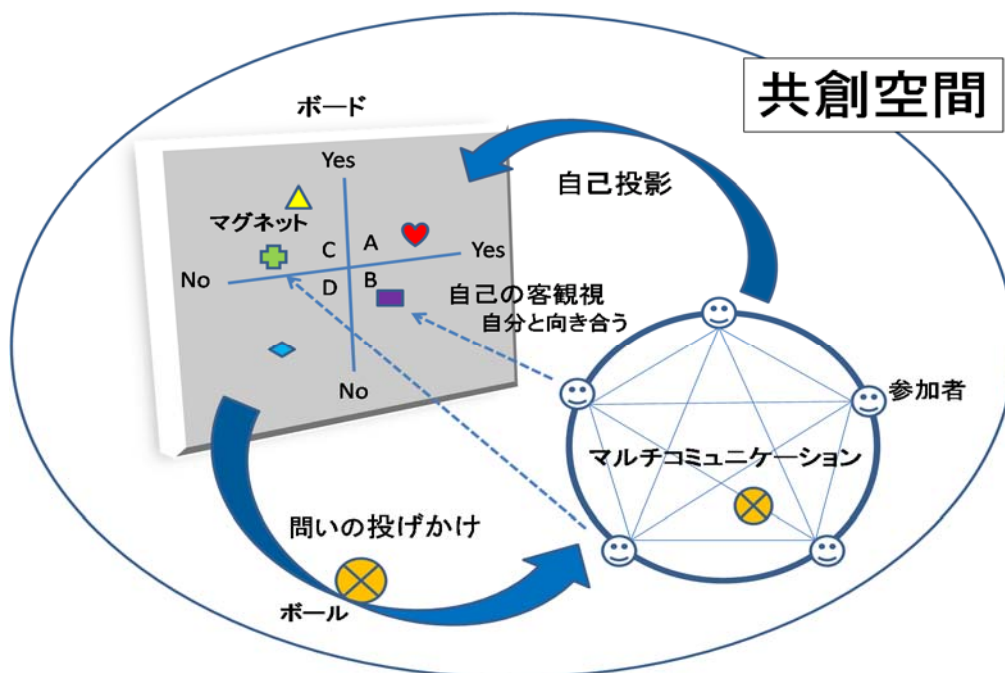
**【ステップ 8】** 議論を進める過程で、自分の考えが変わった人はマグネットの位置を変える。この変化が生まれることを尊重する。

議論が一巡し、参加者の意見交換が終わると、ボードを写真にとり、進行役や各人のメモと共に成果物として保管する。

注：以上で進め方の手順の説明は終わるが、共創マトリックスを使って思考のプロセスを吟味・解明する発想は、大場裕之・大場ゼミナール[2007]『学問力のすすめ』（麗澤大学出版会）の中で「価値意識マトリックス」として紹介されている（44～47ページ）。また、上記の進め方に関する記述は、大場裕之・ライフスタイル研究会[2013]『「共創空間で地球を旅しよう」麗澤大学経済社会総合研究センターから要約引用した（126～132ページ）。

この技法は参加者の考えや思いを「見える化」し、他者の発言に傾聴し自らの考え方、感じ方（価値観）を吟味すると同時に、異なる意見や価値観を理解・共有、あるいは共感することを通して、新たな発想を共に創りあげるのに有効である。この技法の全体像をイメージ化すると以下の図表4のようになる。

図表 4：共創空間とは



出所：大場裕之＋ライフスタイル研究会[2013]『「共創空間」で地球を旅しよう』麗澤大学経済社会総合研究センター、130 ページ。

この技法は[ステップ 8]で終わるので、成果のまとめが無い状態である。つまり、発想法的には参加者が自由・平等に発言する発散思考だけで、発言をまとめるという収束思考が無いと一見考えられる。

しかし、この技法の特徴は、ボードに投影された発言全体を共有財産として受止めて、そこから何を引き出すかは参加者の自由な選択に任されるのである。参加者が共に創りあげたボードの全体空間を眺めて、一人ひとりの頭の中で新しい考えを創出する収束思考を進めるのである。特定の結論を参加者に背負わせないで、個人の気づきと選択に委ねることが、この技法の特徴なのである（場合によっては、会合の場で進行役がリードして収束思考の段階へ進むことも有りうる）。

ボードに置かれた一つひとつの発言のマグネットを星と見立てるなら、ボードはあたかも星空のような小宇宙である。そこには理性軸と感性軸とが統合・融合した参加者の考えと意思の全体像を見ることができる。この小宇宙を眺めていると、各人の思いこみや固定観念は小さな星であることに気づく。この気づきから、己を空にした新しい流れ星を発見する機会が与えられるのである。収束思考は、この流れ星の発見過程のようなものである。

収束思考を急がないのは、もう一つの理由がある。それは目的志向を重視すると画一化、単純化の危険性があり、それを避けるために、価値観の多様化した現代社会では複数性（多様性より幅が狭い）を尊重し、多様・多彩な価値観の存在を認め、寛容性と柔軟性を維持

することが民主主義的であり、個人の尊厳でもある。また、「書物は過去の遺産・遺物にすぎない。大切なことは過去ではなく未来にある」と言われているように、学問的にも過去の遺物に囚われることなく、現在を重視した未来志向の発想が求められている。

小論では、固定観念や思いこみを融解して、“共創（共に学び、共に創る）”という新しい「考え」に導く「考え方」（マインド・セット）を中心に述べた。この技法は様々な分野に活用できるので、目的に合わせて応用することが必要である。

#### ④CSD 技法を実践した成果と直面する課題とは何か

技法は実際に活用されてこそ意義がある。これまで、CSD 技法はおもに教育・研修分野、市民活動で実践され、以下のように具体的な成果を生み出したことが報告されている。

- 1) コミュニケーションの活性化：「見える化」された多様な考え・思いを尊重する。一人一人の意見を平等に扱い、あらゆる差別を排除する。結論づけは個人の自由意志に基づく判断に委ねる。
- 2) セルフ・カウンセリングの技法：感性から入り理性に導く「感入・理出」なので、本音で会話ができる。自他のマグネットを見ながら、自分と向き合うことができる。
- 3) 組織の活性化：自由で開放的な意思疎通を促進し、風通しの良い組織風土を醸成。大学のゼミ活動や講義、さらには研修現場の雰囲気に変化し、活気生まれる。
- 4) 大学生向けのアクティブ・ラーニング：知識（専門知）の一方的移転という受身の授業ではなく、学生自らの考えや感じ方を発信できる機会が提供されている双方向型の授業の実践。現在注目されているアクティブ・ラーニング手法として活用できる。経営学、インド経済論、ライフスタイル論、文化論、英語教育などの授業で実践している。
- 5) 社会人向けの生き方探し：中高年を対象とする市民講座では、生き方（ライフスタイル）や生きがい探しだけでなく、ボケ防止や認知症予防にも役に立つ。
- 6) 自己練磨・「気づく」力・判断力の修得：共創空間を体験すると、多様な考えや思いを知り、他者との会話を通して、気づきが芽生え、寛容性や柔軟性が身に付く。人は賢明とも言われているが、完全無欠ではない。気づかない自己に気づく訓練の場として効果的である。体験学習（いわゆるサービス・ラーニング）効果が大きい。
- 7) 本質的な問いの発見：ひとつの課題（テーマ）に対する様々な答えを「見える化」できるので、それらの答えの中から、核心的な問題を発掘した。
- 8) 共創に基づく学術研究：既成概念を多角的に吟味・検証することによって、新たな発想や分析視点を発見することができ、創造的な研究の産婆役機能を果たす。論文作成において、研究テーマの問題⇒原因⇒解決策、各々のレベルにおいて価値判断があるので、これを「共創空間」で吟味すれば、よい作品生まれる。
- 9) 学会や NGO 団体での実践：異文化コミュニケーション学会やピースボート (Peace Boat、国際交流を目的として 1983 年に設立された日本の非政府組織 (NGO)) での実践。

- 10) 理念の共有化や共創基準による評価：「知徳一体」の教育理念の共有化、および“共創”に基づくゼミ活動の実践（麗澤大学）。また、一般財団法人海外産業人材育成協会（略称：HIDA＜ハイダ＞）においては、外国人管理者（アジア、中近東、アフリカ）を対象とする研修の場において、共創経営、共創リーダーシップを実践するとともに、研修評価事業でも共創基準による評価活動を実施した。

以上の他にも、今後の活用分野として、初等・中等教育の現場において、深刻な社会問題となっている子どもの「いじめ」解消として、学年のクラス単位で共創マトリックスを実施し、設問として「嫌がらせ発言」「暴力」「仲間はずれ」などを取上げて共創することも効果があると考えられる。今後は、国内外において、活用事例を増やし、実施例と所見を集めて技法そのものを進化させる必要がある。BSやKJ法の先行研究は数10年を経過して進化したように、共創空間開発の技法としての完成度を高める作業を今後も継続すべきだと考える。筆者（山岡）も市民活動の場で機会を見て、この技法を実践しているが、より進化させるために次の課題について、具体的にに取り組む必要があると考えている。

- 1) 設問（テーマ）とタテ軸・ヨコ軸の文言（問い）の決め方（設問の決め方、軸の設定の原理・原則の明示化、軸に付ける文言の選び方）。テーマは、参加者全員にとって価値のある共有可能なもの。ヨコ軸にセットする最初の問いは、イメージしやすい具体的なもの、感覚的なものが効果的。次のタテ軸にセットする問いは、最初の問いに対する多様な答えを吟味し、より本質的な原因や解決策を導けるものがよい。
- 2) 進行役（ファシリテーター）の役割を明確化すること。自己の色を出さない態度。
- 3) 参加者の構成と人数の違いに応じて、弾力的に進め方を変える工夫する。
- 4) 教育・研修現場だけではなく、公的機関・民間企業等の職場での実践。
- 5) 共創マトリックス実施後の活かし方。発散思考を収束思考へ展開する仕方。

「共創空間」に入る前の準備段階と終了後の内容整理とその共有化の方法を明示化する。

- 6) 共創空間開発技法の実施例と所見を収集し、ワークブックとして体系化すること。

共創空間開発技法（CSD技法）について種々と述べてきたが、この技法は「新しい知を創出する道具」とも言える。一般的に道具には詳細な「取扱い説明書」が添付されているように、上記1)～6)のような「進め方の説明書」を追加し、さらに「マニュアル」あるいは「教材」に仕上げるのが、この技法の一層の進化・普及に役立つと考える。

## おわりに：

「共創空間」の学問的意義や知のイノベーションとしての「共創知」の技法について論じてきた。その背後にある我々の問題認識とは、この世の中で最大・最強の敵とは、今日の地球温暖化やテロリズムなどではなく、合理的経済人に内包される自己中心的価値判断に科学的なメスをいれる必要性であり緊急性である。共創空間開発学とは客観的かつ具体

的にこの問題を取り上げ、マインド・セットが吟味され、自己解放の機会を提供する学問である。

共創空間開発研究会（略称、共創研）のメンバーによって 2015 年 3 月出版された本『共創空間開発学のすすめ』では、社会科学の各分野の専門家が最も情熱を注いでいる 10 本の社会的に重要なテーマ（問い）・事例を紹介している。これらのテーマ・事例をもとに、共創知―「共創空間」を体験的に知ること―によって、専門知および価値判断の基準そのものが吟味され、マインド・セットが変革されることとなった。以下ではこの本で実践した共創知によるマインド・セットへの効果に関する各専門家自身の声を紹介することによって、このペーパーの結論とする。

この本は、「ゆるしと自由」（水野修次郎、第 1 章）でスタートする。「土下座をすればゆるされるのか」という判断軸と「人はゆるすことで苦しみから自由になれるのか」という判断軸からなる共創空間を開発した。その結果、現実の世界では、ゆるしに対して、心理学的理解を超えた霊的（spiritual）な気づきが大きく影響を及ぼしている知見を得た。

次のテーマは、「ロボットと心」（立木教夫、第 2 章）。ロボットでは広すぎてイメージしにくいので、「ロボット・ペット」に限定して、「心を持たせることはよいか悪いか、また可能か不可能か」という共創空間を開発した。その結果、心（脳）に対する見方が実に多様であることに気づかされたこと。また、個人の見解を共通の広場に持ち出し、共有したことで、参加者一人一人の思考の枠が広がり、意見形成が促進された。この CSD 技法は、自己の立場を他者の立場と比較し、反省的にとらえ直す上で大いに役立った。

第 3 のテーマは「在宅医療とマーケティング」（目黒昭一郎、第 3 章）。「在宅医療を受けたいか、受けたくないか」という判断軸と「在宅医療事業にマーケティング的発想は必要か否か」という判断軸からなる共創空間を開発した。その結果、共創空間上には、在宅医療を受けたいし、その事業にはマーケティング的発想は必要」とする A ゾーンに意見が多く集中する知見を得た。共創知を体験することによって、この CSD 技法は生活空間から新たな価値を掘り出すための実践的なツールとして開発する意味は極めて大きいとしている。

第 4 のテーマは「合意形成と広告」（高橋徹、第 4 章）。広告会社のマーケティング戦略を事例として、組織における合意形成には共創空間を開発すること（適切な軸を抽出する作業）は有効であるとの結論に達している。また、広告の価値検証（広告はもっと増えてよい・減らすべき、役に立つ・役に立たない）にも効果的としている。共創空間による合意形成に求められる能力として、①意見の根拠となる客観的データ（定量・定性）そのものを取り扱う能力、②コミュニケーション（キャッチボール）能力、③相手（仲間）を思いやる気持ち（マンガのウサギ部長のような広い視野を持つこと）としている。

第 5 のテーマは「環境税とイノベーション」（永井四郎、第 5 章）。「環境税（導入）に賛成か反対か」という判断軸と「汚染除去のためのイノベーションをするか否か」という判断軸からなる共創空間を開発した。その結果、共創知によって発見した知見とは、①環境改善は緊急課題であり、何らかの規制が必要であること、②汚染除去のためのイノベーシ

ョンはきわめて重要であること。また、共創空間開発学とは、3次元空間に置かれている我々人間には知ることができない事象を認識する手がかりを探し求めようとする学問であるとしている。

第6のテーマは「**女性の労働参加**」(露木かおり、第6章)。日本の女性が直面する「家庭と仕事の両立(できるのか)」と「労働市場への参加意欲(参加を望むか)」の関係性について2つの判断軸を開発して共創してみた。その結果、女性の労働参加に関する価値観(マインド・セット)が大きく異なること、を発見できた。また、このテーマを個人で深めていくと、どうしても偏った考えに固執してしまい、非常に重要な点を見落としてしまうことに気づいた。さらに、共創空間を開発することによって、複眼的な見方が可能となり、政策的な意味においても多くの解決策を見つけるヒントが与えられた。

第7のテーマは「**グローバル教育と日本の大学**」(山下美樹、第7章)。「グローバル教育は理想なのか」という軸と「日本の大学教育はグローバル人材を育てる上で役立っているのか」という軸を交差させて、共創した。その結果、以下のような6つの重要な気づきが与えられた。①無知は罪なり：地球的視野で考える、②人間は環境に依存する弱い存在であることを認識する、③自分の解釈を問い直し、固執した考えを手放してみる、④英語力向上のみならず母国について知る、⑤教育の評価方法についての見直しの必要性、⑥全てがグローバル教育につながることを。

第8のテーマは「**食と異文化コミュニケーション**」(内田加奈美、第8章)。食では広すぎるので、肉食に限定し、「肉を食べない異文化の人」と向き合う問題を共創した。向き合いたい(向き合いたくない)ことと向き合うことができる(できない)ことは異なる判断基準なので、2軸の共創空間を開発した。その結果、この空間を開発すること自体が肉を食べる者にとっての「異文化体験」の空間となり、異文化コミュニケーションを効果的に実践する活動の場となっていることに気づいた。また、「肉を食べる文化」の人間が「肉を食べない文化」の人間と向き合う時に起こりうる衝突を回避し、相手を傷つけない対処方法(スキル)等が具体的に提案された。さらに、共創するプロセスにおいて、当初設定した2軸の「問い」を超えた、「愛」というさらに「深い問い<テーマ>」(①1人の人間として、異文化を持つ相手を愛せるか否か、②どのような「愛」が大切なのか)が発見された。

第9のテーマは「**正義：人間と神**」(ピーター・ラフ、第9章)。「正義(justice)について自らの人生において、あるいは他人の人生の中でどの程度意識しているのか」という軸と「世界において正義が行われるとしたら、それは人間のわざなのか、それとも神のわざなのか」という軸を交差させて共創空間を開発した。その結果、正義に対する価値観、とくに誰が正義を行うのかという問いに対して、大きく異なる意見があることに気づいた。ひとつは、人類だけが正義をもたらすことができ、その正義とは地域や時代によって異なるとする見方である。もうひとつの立場は、正義は神から来るという見方である。その正義とは絶対的、普遍的であり、この正義を人生において行うことに対して、より大きな意義がある、とする見方が紹介された。2つの見方が現実存在し、そこに選択の自由がある。

最後の第10のテーマは「**経済的富と健康**」(大場裕之、第10章)。「**貧しき経済人が経済的富(モノ持ち・カネ持ち)を目指す(目指さない)こと**」と「**健康的な生き方となる(ならない)**」との関係性を探るために、「共創空間」を開発した。その結果、登場した貧しき経済人たちは多様な健康観を持った生き方(価値観)に依拠して存在していることが明らかとなった。また、経済的富の追求は健康的な生き方を犠牲にするという対価を払う事実も浮き彫りとなった。もっとも、この共創プロセスにおいて、健康観が身体的およびメンタル的な次元での健康に偏っており、スピリチュアルな健康については意識されていなかった。この健康を加味したとき、貧しき経済人はスピリチュアル的な病気である、自己中心性、即ち「罪」という病気に罹っており、医者には治せない病であることが判明した。しかし、この病から解放される唯一の「救い」が用意されているということも知り得た。

以上、10本のテーマに対して「共創空間」で向き合うことによって、様々な価値観に触れ、気づかない無意識の世界にも光が差し込み、大いなる「気づき」がもたらされたのではなかろうか。まさに、各々のテーマのタイトルこそが共創知によって発見された核心的な問題である。「共創空間」とはまさに、参加する者すべてにとっての“非暴力空間”である。同時に、個々人にとっては、“自己内競争”が発生し、どの自分を捨て、どの自分を選び取るのかという自由がある、「厳しい愛」と「憐れみの愛」とに囲まれた空間である。

## 参考文献：

福澤諭吉著、齋藤孝訳[2009年]『現代語訳 学問のすすめ』筑摩書房。

マックス・ウェーバー著、尾高邦雄訳[1936]『職業としての学問』岩波書店(1988年第56刷発行、岩波文庫)。

マックス・ヴェーバー著、木本幸造監訳[1972]『社会学・経済学における「価値自由」の意味』日本評論社。

マックス・ウェーバー著、大塚久雄訳[1989]『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店(改訳、岩波文庫)。

マックス・ウェーバー著、富永祐治・立野保男訳[1998]『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店(旧版『社会科学方法論』の補訳新版、岩波文庫)。

K. レーヴィット著、上村忠男・山之内靖訳[1989]『学問とわれわれの時代の運命』未来社(フィロソフィア双書26)。

塩野谷祐一[1981]「価値理念の方法論」『経済学研究』23(8月)一橋大学研究年報 67-168ページ。 (<http://hdl.handle.net/10086/9318>)

塩野谷祐一[1984]『価値理念の構造—効用対権利—』、東洋経済新報社。

G. キング、R. O. コヘイン、S. ヴァーバ著、真淵勝訳[2004]『社会科学のリサーチ・デザイン—一定性的研究における科学的推論』勁草書房。



H. E. ブレイディ、D. コリアー編著、泉川泰博・宮下明聡訳[2008]『社会科学の方法論争—多様な分析道具と共通の基準』勁草書房.

H. Oba [2010]Gakumon-Ryoku and Japanese style of management-does our management style matter? , *Manager Journal*, Faculty of Business and Administration, University of Bucharest, Romania, No. 11 ISSN:1453-0503, pp. 51-60.

H. Oba [2011]Does J-style “Kaizen” management create the joy of service?-Exploring the Co-creative Human Development Model, *Manager Journal*, Faculty of Business and Administration, University of Bucharest, Romania, No. 14 ISSN: 1453-0503, pp. 76-84.

大場裕之＋大場ゼミナール[2007]『学問力のすすめ—“活きた”学問を楽しむために』麗澤大学出版会.

大場裕之＋ライフスタイル研究会[2013]『「共創空間」で地球を旅しよう』麗澤大学経済社会総合研究センター.

大場裕之＋「共創空間」開発プロジェクトチーム[2015]『共創空間開発学のすすめ—知のイノベーションの新技法』麗澤大学出版会.

大場裕之[2009]「貧困をみる眼と自由の選択：価値実現論からのアプローチ」下村恭民＋小林誉明編著『貧困問題とは何であるか—「開発学」への新しい道』第6章執筆分担，勁草書房，221-258 ページ.

清川雪彦[2003]『アジアにおける近代的工業労働力の形成』岩波書店.

大塚久雄[1966]『社会科学の方法』（岩波新書 607）岩波書店.

マックス・ウェーバー著、尾高邦雄訳[1936]『職業としての学問』岩波書店（1988年第56刷発行）.

K. レーヴィット著、上村忠男・山之内靖訳[1989]『学問とわれわれの時代の運命』未来社（フィロソフィア双書 26）.

竹内一正[2011]『ハングリーであり、愚かであれ。—スティーブ・ジョブズ 最強脳は不合理に動く』朝日新聞出版.

A. スミス著、水田 洋訳[2003]『道徳感情論（上）・（下）』（岩波文庫）岩波書店. (Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, 1759)

A. F. オズボーン著・上野一郎訳[1982]『独創力を伸ばせ』ダイヤモンド社.

川喜田二郎[1967]『発想法—創造性開発のために』中央公論新社.

高橋誠[1999]『「問題解決手法の知識 新版」』日本経済新聞社.

田口寛治[1955]『論理学—古い論理学と新しい論理学』理想社.

星野匡[2005]『発想法入門 第3版』日本経済新聞社.

笠信太郎[1987]『ものの見方について』朝日新聞社.

日本生産性本部創造性開発委員会[1971]『人間性と創造性の開発—やる気を起こす内発的経営への道』日本生産性本部.

西垣通[2013a]『集合知とは何か—ネット時代の「知」のゆくえ』(中公新書)新書

西垣通[2013b]「集合知の力—専門知を補完する新たな知のあり方」『DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』(9月号)ダイヤモンド社.

太田直樹[2013]「異質の知が新たな事業をつくる」『DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』(9月号)ダイヤモンド社.

A. ブリスキン他著・上原裕美子訳[2010]『集合知の力、衆愚の罠—一人と組織にとって最もすばらしいことは何か』英治出版.

志村正道[2009]「集合知とウェブ」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』(2月、10号)32-39ページ. (<http://www.yc.tcu.ac.jp/~kiyou/no10/1-04.pdf#search>)

上田修一・石田栄美・宮田洋輔・南友紀子・倉田敬子[2013]『レビューサイトにみる集合知の可能性—アマゾンカスタマーレビューを例として』第61回日本図書館情報学会研究大会(10月12日). (<http://user.keio.ac.jp/~ueda/papers/rs2013.pdf#search>)

シーナ・アイエンガー著・櫻井祐子訳[2010]『選択の科学(The Art of Choosing)—選ぶことこそ力につながる』文藝春秋.

スコット・ペイジ著・水谷淳訳[2009]『「多様な意見」はなぜ正しいのか—衆愚が集合知に変わるとき』日経BP社.

シャロン・ベグリー[2011]「I Can't Think! 思考力の低下はツイッターのせい?」『ニューズウィーク誌』3月16日号, 40~45ページ.

遠藤由美[2007]「多様な意見共有状況下での相対比較判断におけるバイアスと自己中心性の役割」『実験社会心理学的研究』(Vol. 47, No. 2) グループ・ダイナミクス学会, 134-145ページ.

[1970]『聖書—新改訳』いのちのことば社(絶版).

エミー・カーマイケル著・湖浜馨訳[1989]『主の道を行かせてください—日毎の霊想』いのちのことば社.

オズワルド・チェンバーズ著・湖浜馨訳[1990]『いと高き方のもとに(My utmost for his highest)』いのちのことば社.

小林康夫・船曳建夫編著[1994]『知の技法』東京大学出版会.

小林康夫・船曳建夫編著[1998]『新・知の技法』東京大学出版会.

小林康夫編著[1998]『学問のすすめ』筑摩書房.

J. カルファ著・今井邦彦訳[1997]『知のしくみ—その多様性とダイナミズム(What is Intelligence?)』新曜社.

M. Imai[1991]*Kaizen-The Key To Japan's Competitive Success*, McGraw-Hill, Inc.(International editions), Singapore.

# 経済社会総合研究センター Working Paper 発行一覧

No.	発行年月日	題 名 / メンバー
1	2001/04/29	■品質を考慮した中古マンションの価格モデルの推定 [ 小野 宏哉・高辻 秀興・清水 千弘 ]
2	2002/03/01	■国家の在り方に関わる基本問題 ―日本国家の戦略的危機管理を考える― [ 大貫 啓行 ]
3	2002/04/01	■首都圏中古マンション市場を対象とする品質調整済住宅価格指数の開発 ―市場の構造変化と指数の接続― [ 小野 宏哉・高辻 秀興・清水 千弘 ]
4	2002/03/12	■日本のアイデンティティと外交政策 [ ロナルド A・モース ]
5	2002/03/15	■イスラムの拡大と21世紀の国際社会理解の為に ―イスラム拡大が引き起こす諸問題― [ 保坂 俊司 ]
6	2002/03/27	■地理情報システムでの利用を考慮した地域経済環境データベースの構築 [ 籠 義樹・高辻 秀興 ]
7	2002/03/31	■Real Options研究の現状 [ 高辻 秀興・小野 宏哉・佐久間 裕秋・籠 義樹 ]
8	2002/09/25	■技術革新と景気循環システム [ 永井 四郎 ]
9	2002/10/22	■地方自治体財政の現状分析 ―普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較― [ 佐久間 裕秋 ]
10	2003/03/06	■財政赤字、公債と家計消費 [ 中村 洋一 ]
11	2004/02/01	■地方自治体財政の現状分析 ―普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較― 平成12年度決算 [ 佐久間 裕秋 ]
12	2004/03/01	■デフレーション下の経済政策 [ 永井 四郎 ]
13	2004/03/20	■産学共同プロジェクト ～論理的企業風土確立に向けての組織改革～ [ 中野 千秋・山田 敏之・福永 晶彦・野村 千佳子・長塚 皓右 ]
14	2004/03/25	■私立大学財務の脆弱性と安定性 [ 浦田 広朗 ]
15	2004/03/25	■インフォーマルな金融システムの発展と政府の役割 ―「合会」（無尽）の発展における公的対応に関する日中比較研究― [ 陳 玉雄 ]
16	2004/03/25	■生命表形式による労働力と就業構造の分析：1987-2002年 [ 別府 志海 ]
17	2004/07/10	■日本ベンチャーキャピタル産業の発展プロセスとインプリケーション [ 李 宏舟 ]
18	2004/11/25	■Conjunct method of deriving a hedonic price index in a secondhand housing market with structural change [ 小野 宏哉・高辻 秀興・清水 千弘 ]
19	2005/03/01	■地方自治体財政の現状分析 ―普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較― 平成14年度決算 [ 佐久間 裕秋 ]
20	2006/03/25	■Incorporating Land Characteristics into Land Valuation for Reconstruction Areas [ 小野 宏哉・清水 千弘 ]
21	2007/02/15	■土地利用の非効率性 ―東京都区部・事務所市場の非効率性の計測― [ 清水 千弘・唐渡 広志 ]
22	2007/02/18	■モンゴルにおける国際援助の経済効果、人口ボーナス [ セリーテル・エリデネツール ]
23	2007/02/20	■大正時代初期の宇都宮太郎 ―参謀本部第二部長として― [ 櫻井 良樹 ]
24	2007/03/31	■東アジアにおける企業家活動と地域産業の発展に関する研究 [ 佐藤 政則・陳 玉雄・連 宜萍・丘 紫昀 ]
25	2007/11/29	■Change in house price structure with time and housing price index ―Centerd around the approach to the problem of structural change― [ 清水 千弘・高辻 秀興・小野 宏哉・西村 清彦 ]
26	2007/11/29	■炭素税による温暖化対策の不確実性 [ 清水 透・小野 宏哉 ]
27	2008/03/31	■『人民日報』からみた「改革・開放」 ―中国の国際情勢認識と経済制度― [ 佐藤 政則・陳 玉雄 ]
28	2008/03/31	■中国の環境問題を考える [ 三瀧 正道・陳 玉雄・金子 伸一・汪 義翔 ]
29	2008/12/25	■近代日中関係の担い手に関する研究（中清派遣隊） ―漢口駐屯の日本陸軍派遣隊と国際政治― [ 櫻井 良樹 ]
30	2009/01/25	■Econometric Approach of Residential Rents Rigidity ―Micro Structure and Macro Consequences― [ Chihiro Shimizu ]

No.	発行年月日	題 名 / メンバー
31	2009/03/27	■日本の経営は“意欲的労働力”の創出によって効果的か – “理念共有化”仮説の提唱 – [ 大場 裕之 ]
32	2009/03/31	■サブプライム問題以降の大きな変化と世界経済、オバマ政権の経済外交政策 [ 成相 修 ]
33	2009/03/31	■「銭荘」の発展と衰退 – 「中国式銀行」の衰退要因に関する試論 – [ 陳 玉雄 ]
34	2009/04/13	■Investment Characteristics of Housing Market – Focusing on the stickiness of housing rent – [ 清水 千弘 ]
35	2010/02/01	■What have we learned from the real estate bubble? [ 清水 千弘 ]
36	2010/02/01	■Structural and Temporal Changes in the Housing Market and Hedonic Housing Price Indices [ 清水 千弘・高辻 秀興・小野 宏哉・西村 清彦 ]
37	2010/02/12	■日本の経営の海外移転は成功しているのか – 職務意識による理念共有化仮説の検証：メキシコ進出日系M社工場の事例を中心に – [ 大場 裕之 ]
38	2010/03/31	■中国の社区を考える [ 汪 義翔・三瀧 正道・金子 伸一・陳 玉雄 ]
39	2010/03/14	■日本の雇用形態の多様化に関する研究調査 [ 成相 修・佐藤 純子 ]
40	2010/07/01	■Will green buildings be appropriately valued by the market? [ Chihiro Shimizu ]
41	2011/03/10	■緊張が増す朝鮮半島と日本 – 「2010 東アジア共同体への課題」プロジェクト研究報告 – [ 成相 修・金 泌材 ]
42	2011/03/31	■自動車リコール届出による不具合データの収集および整理 – 報告書 – [ 長谷川 泰隆 ]
43	2012/01/31	■内外国債市場と高橋是清：1897～1931 [ 佐藤 政則・永廣 顕・神山 恒雄・武田 勝・岸田 真・邊 英治 ]
44	2012/03/31	■中国における伝統的文化の再評価と産業化・国際化 [ 三瀧 正道・汪 義翔・金子 伸一・陳 玉雄 ]
45	2012/03/31	■市民の環境意識と環境配慮行動への取り組みの現状 – 千葉県柏市の事例 – [ 籠 義樹 ]
46	2012/05/01	■都市基盤整備財源はどのように調達すべきか？ – 都市の老朽化への対応と開発利益還元 – [ 清水 千弘 ]
47	2012/05/08	■売却／購入過程における住宅価格 – 募集価格と成約価格 – [ 清水 千弘・西村 清彦・渡辺 努 ]
48	2012/10/15	■Biases in commercial appraisal-based property price indexes in Tokyo – Lessons from Japanese experience in Bubble period – [ Chihiro Shimizu, Kiyohiko, G. Nishimura, Tsutomu Watanabe ]
49	2012/10/15	■Commercial Property Price Indexes for Tokyo – Transaction-Based Index, Appraisal-Based Index and Present Value Index – [ Chihiro Shimizu, W. Erwin Diewert, Kiyohiko, G. Nishimura, Tsutomu Watanabe ]
50	2012/10/15	■The Estimation of Owner Occupied Housing Indexes using the RPPI: The Case of Tokyo [ Chihiro Shimizu, W. Erwin Diewert, Kiyohiko, G. Nishimura, Tsutomu Watanabe ]
51	2012/10/15	■Office Investment Market Becoming More Selective – Selection of the Winning Market in Tokyo's 23 Wards – [ Chihiro Shimizu ]
52	2012/11/17	■住宅価格指数の具備すべき条件 – 国際住宅価格指数ハンドブックの論点を踏まえて – [ 清水 千弘 ]
53	2013/01/01	■不動産投資リターンはどのように決まるのか？ – 資産価格・不動産収益と割引率のマイクロストラクチャの推計 – [ 清水 千弘 ]
54	2013/01/26	■戦前日本の経済道徳 – その形成に関する試論 – [ 道徳経済一体論研究会 編 ]
55	2013/03/29	■1932年日銀引受国債発行はどのようにして始まったのか – 大蔵省・日本銀行・シンジケート銀行からの考察 – [ 佐藤 政則・永廣 顕 ]
56	2013/03/31	■「共創空間」で地球を旅しよう ～ライフスタイルの再発見～ [ 大場 裕之 ]

No.	発行年月日	題 名 / メンバー
57	2013/03/31	■不動産投資関連指数の時系列変動における特徴 [ 鈴木 英晃・高辻 秀興 ]
58	2013/07/09	■最小分散ポートフォリオでの不動産投資の分散効果ダイナミクス Dynamics of Diversification Benefits of Real Estate within Minimum-Variance Portfolio [ 鈴木 英晃・高辻 秀興 ]
59	2013/12/05	■総合収益でみた投資不動産と代替資産の多変量時系列分析 Multivariate Time Series Analysis for Investment Real Estate and its Alternative Asset Classes in Total Return: the Case of Japan [ 鈴木 英晃・高辻 秀興 ]
60	2014/03/24	■社風に応じた企業アーカイブを ー歴史資料を現在と将来に活かすー [ 佐藤 政則 ]
61	2014/03/31	■戦前日本の経済道徳Ⅱ ーその形成に関する試論ー [ 道徳経済一体論研究会 編 ]
62	2014/03/24	■現代中国研究 ー中国の「都市化」に関する分析と提言ー [ 金子 伸一・三潴 正道・陳 玉雄 ]
63	2014/07/11	■How Are Property Investment Returns Determined? [ 清水 千弘 ]
64	2014/11/28	■Dynamics of Diversification Benefits of Real Estate within a Minimum-Variance Portfolio: the Case of Japan [ Hideaki Suzuki・Hideoki Takatsuji ]
65	2015/03/03	■日本航空の経営破綻と組織的要因(1) ー1960年代における「組織と人をめぐる問題」の発生ー [ 大塚 祐一・藤原 達也 ]
66	2015/03/09	■排出係数可変供給関数による環境税モデルの考察 [ 高辻 秀興・永井 四郎 ]
67	2015/03/30	■地方自治体財政の現状分析 ー平成23年度普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較ー [ 佐久間 裕秋 ]

[問い合わせ先]

〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1

麗澤大学経済社会総合研究センター

Tel:04-7173-3761 / Fax:04-7173-1100

<http://ripess.reitaku-u.ac.jp/>

掲載されている論文、写真、イラスト等の著作権は、麗澤大学経済社会総合研究センター及び執筆者にあります。これらの情報は著作権法上認められた場合を除き、無断で転載、複製、翻訳、販売、貸与などの利用をすることはできません。